第三種郵便物認可（明治廿六年四月四日） 毎月一回廿日發行 内務省許可（明治廿一年二月廿八日）

明治三十三年十月二十日發行（明治二十年十一月本會創立）

婦人衛生雜誌

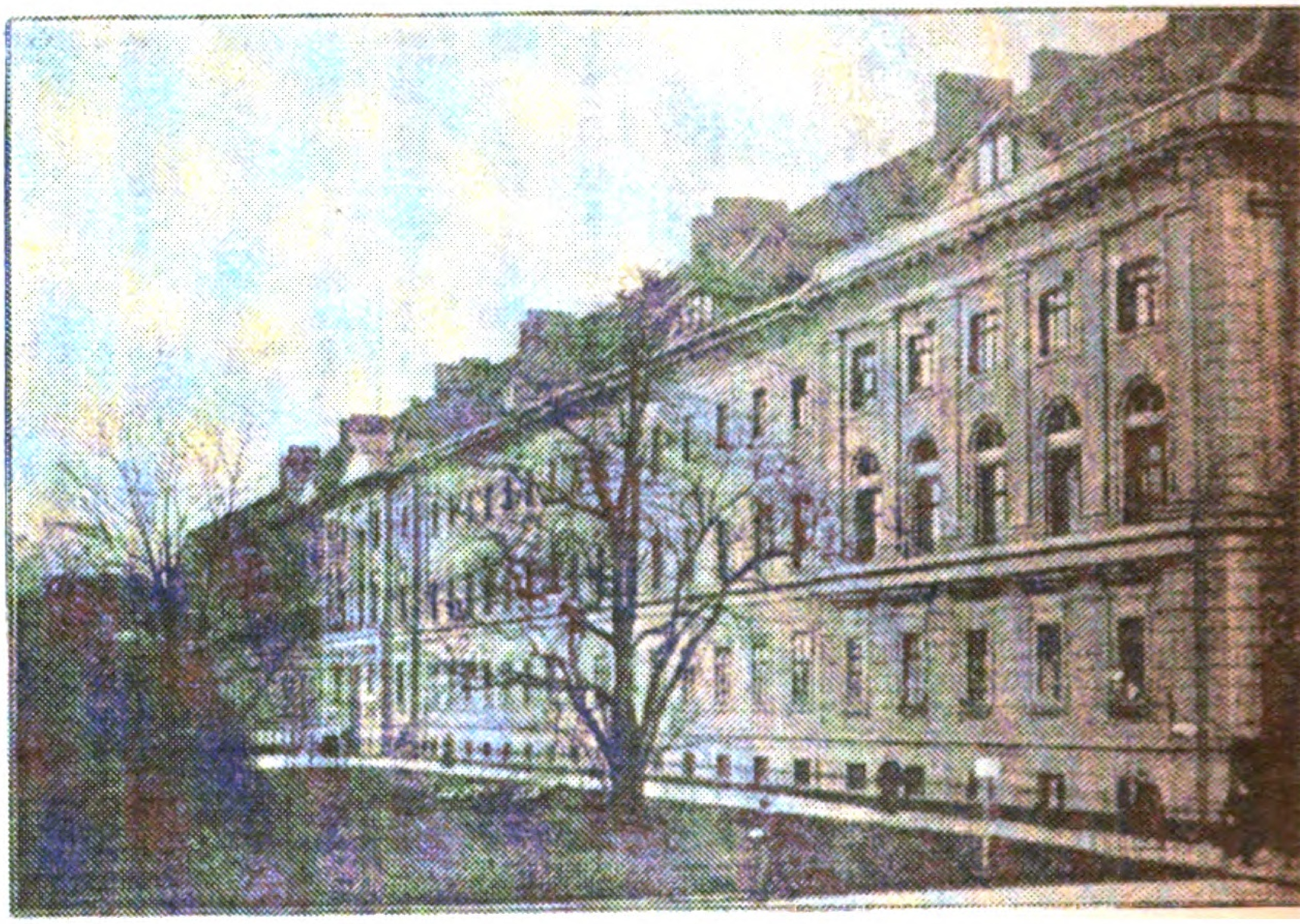
第百參拾壹號

私立大日本婦人衛生會

婦人衛生雜誌

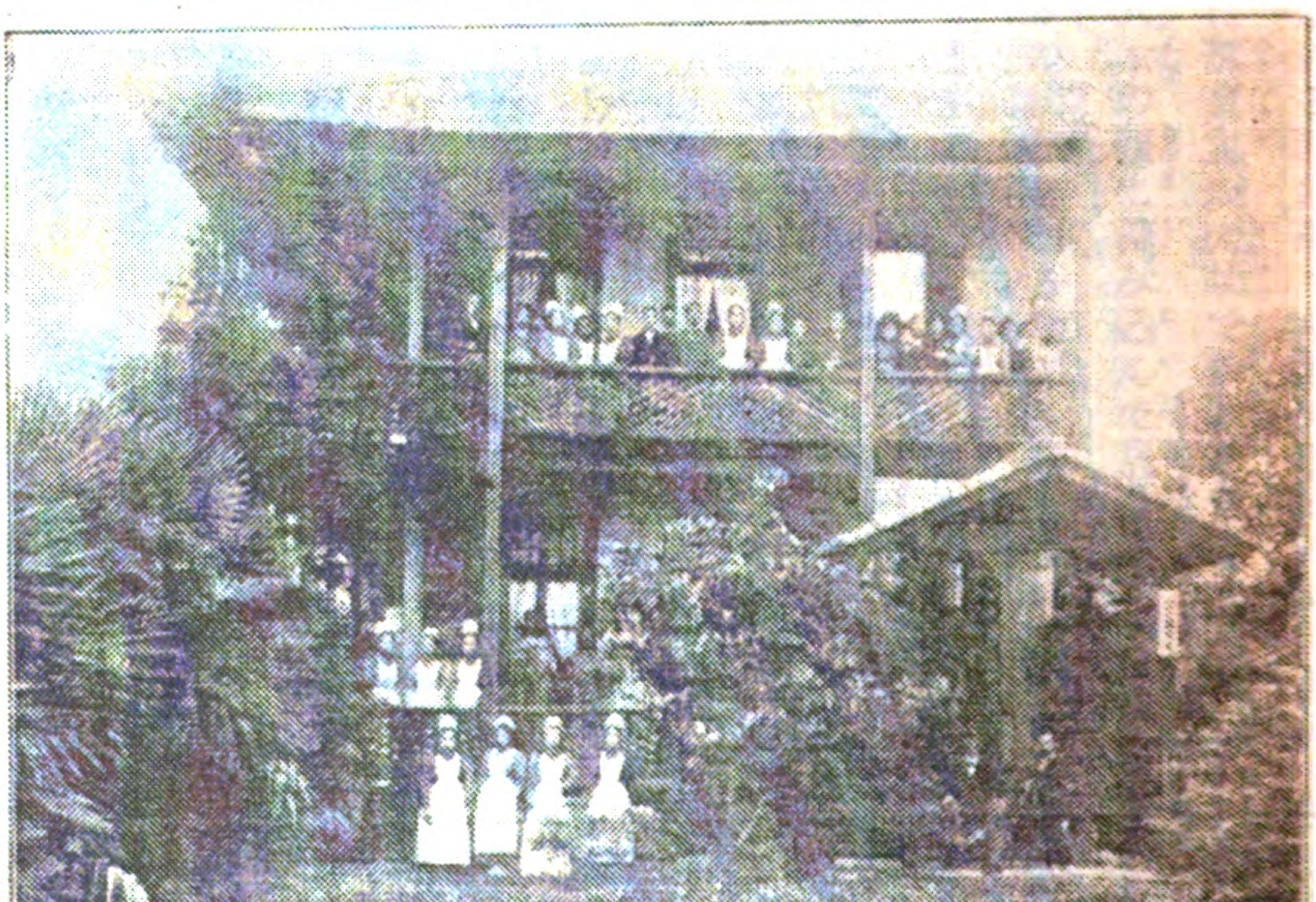
第百三十一號　目次

獨乙ベルリン府王室慈惠病院



（幹事穂積歌子寄送）

大日本京都産院



（京都産院長ドクトル佐伯理一郎君寄送）

婦人衛生雜誌第百三十一號

（明治三十三年十月二十日發行）

講　演

血液經濟の話

Dr S. M.

私は血液經濟のお話をする前に先づ血の話を申上けようと思ひます支那の古い書物に婦人は血を以て主と爲すと云ふ事が御座います。御婦人方に取ッては殊更に血と云ふ物は大切であると云ふ事が支那の書物に記して御座いました。尤も血と云ふものは男女に拘はらず人間の身躰に大切であつて、此血に因て人間は生命を保つて居りますので、片時も缺く可からざるものであると云ふ事は皆様も疾くに御承知で御坐いましやうから、強ち古い說を持ち出して申し上げる程の事でもありませんが、婦人におきましては殊更血が大切であると云ふ支那の說は、數千年來人々の頭に浸み込んで居ります、夫故に血の爲に種々の病氣も起るなどゝ云ふ事が俗說にも擴まつて居りますから、倘委しく此血と云ふとに就て御話しをして置きまするのが衛生上大切であろうと思ひました故、今日は血液經濟と云ふ題を撰みましたので御座います。又近頃人畜の血を用ゐまして傳染病を豫防し、或は已に發し居りまする病に血を藥の如くに用ゐて治すやうになり、益々血の大切なることも解りました此衛生上殊に大切の事で御座いますから、先づ最初に血とは何う云ふものであつて何う云ふ作用を爲すものであるかと云ふことを說き順を追ふて申上けます。

身躰を循環ます血は大切であると云ふことは、支那で申して居りまするには血を榮となすと云ふ、榮は

水穀の精にして目の見えるのも耳の聞へるのも手の握のも皆水穀の精で、水穀の精とは食物の中の最も役に立ちまする部分で、目の見えるのも耳の聞へるのも水穀の生粋で、五體が働いて往くのであると云ふことを數千年前に支那で申して居ります、然るに今日漸く歐羅巴の學問が進んで參いつて生理學上の事なども追々明になッて參りましたので、古し支那で漫然と申して置きました其解し難きことが、生理學の力に因て眞の道理が解ッて來ると云ふ丈けが近頃の新しい生理學の効用であります。如何にして血と云ふものは目に物を見せ、耳に音を聞へしめ手に握らしむると云ふ道理が生理學で解ッて來たのかと云ふ其事を今日御話しを致しまするのですが、其れは既に支那に於て數千年前に云ふて置いたことであります、夫れから血の性質を申します、血の性質は支那の古書に中焦氣を受けて變化して赤しと申してあります、中焦は臟腑の名此節解剖學が開けて參へりまして、中焦と云ふ臟腑はドコにあるかと云ふことを穿鑿して見るに、ドコにあるか確かに解りませぬ併し一説には中焦と云ふ臟腑は今日解剖學で乳糜囊と申す、乳糜の這入ッて居る囊が即ち中焦と云ふ臟腑であると云ふ、一ツの説が有ります、併しながら中焦と云ふ臟腑が氣を受けて……氣と申しても空氣の氣とは違ひませうが、一種の氣を受けて赤くなると云ふ是れは支那の説が誤ッて居ると思はれます、抑々乳糜と云ふものは空氣に觸れて直ぐ赤くなると云ふ譯では有りませぬ、然して今日の解剖學生理學で申します乳糜は水穀の精で我々の飮食致しまする生粋の宜い處の部分が乳糜と云ふものになりまして、乳糜囊と云ふ袋に這入ッて居ります、併し乳糜と云ふは乳と云ふ文字の如く、乳の樣な色を致して居るもので、稀には赤い樣な色を帶ぶる事も有り

ますが、肉眼で見ては薄紅色程にも見えませぬ、ソレ故此白色の物が空氣に當りまして變化して赤くなる之を血となすと云ふやうに、容易に赤くなッて參る譯では有りませぬ、血は御承知の通り赤色であります、併し其赤いのは何が赤い色をして居るのかと云ふに、是れは顯微鏡の力を借りませんければ解りませぬが、顯微鏡で血を見ますると赤血球と云ふ圓い赤い球がある、尤も顯微鏡で見るときは赤色ではなく殆んど黄金色とも申す程の黄色を現はして居ります、其黄色の者が澤山集ッて我々の肉眼に見える通りの赤血になつて居ります、今一ッは白血球と申します、白い血の球是れも顯微鏡の力を借りなければ見えませんが、極く細く小さい球が血の中に御座います、此白球は乳糜の中に多くして赤血球の方は極めて稀れで御座います、夫れ故乳糜は白く尋常一般の血と云ふものは赤くなッて居ります、シテ見ますると乳糜と申す水穀の中の生粋の部分が漸々に變じて赤くなるのは、氣を受けて直樣赤くなると云ふ樣な容易きことではない、乳糜は澤山に血の中に混りて段々に白球が赤球の方に變るので有ろうと云ふ説が從來御座いました、然るに亦此頃起りました一説には赤球の方が先きに出來て、段々に變じて白球になるのである、赤血球の色が褪めて白い球になるのであると云ふ説が出ました、併し是等の六ッヶ敷議論は皆樣に申上げる必要もないことで、當時の學者間の問題で白い方の球が先に乳糜の方で出來て、夫れから赤球になると云ふのが一寸と考へても解り易い説で御座いますが、今一ッの説は其裏から申しまして赤球が崩れて白球になると云ふ説が起ッて參りましたから、事の序に御吹聴をして置くのみのことで御座います。

ソコで何う云ふものが赤い球、何う云ふ者が白い球

となると云ふことを申しましたが、血と申す者は唯赤球と白球とのみで流通して居るのでは、御座いませぬ、必ず水の様な流動躰に混り流通して居るソレを血漿（血漿とは血液の中の無色の澄水を云ふ）と申します、血と云ふものは其澄水と紅白血球とは全く當半とは申されないが、顯微鏡で球の形に見へますものと水とは凡そ半々と御考へ下されば大いな間違は御座いませぬ。

從來の生理の事に就て一寸申して置きますが、是迄の血液の中の大切なる部分は何であるかと云ふに、第一に赤血球が最も大切のものだと考へて居ます、其次が白血球其次が血漿である、斯う云ふ工合に水は形が無いものでありますから一番やすく見なされて居りました、然るに追々に衛生學生理學等の研究が積んで參りましたので、或人は白血球に大層の價値を附けまして、「白血球は非常に尊いものである」と申しましたが、又近頃になりまして血の中の澄水を用ゐて傳染病を豫防する樣になりまして、澄水の中にも効能の有る事が現はれて參りました、ソレ故最早近頃になりましては衛生學の方では最初一番價値ありと申して居りました赤血球は一番價値の少ないものになつて、參りました學問は次第に進歩まして研究が積むに從て從來價値の乏しいと思ひしものも非常に尊くなり價値の有りしものも、却て無くなる樣になりますもので、最も價値の有るものと思つた赤血球よりも價値の少ないものとして有りました血漿の中に、大なる効能が有ると云ふ事を發見致されました。

又元に戻りまして唐の說に「血は脾臟に成り、心臟に統べ、肝臟に藏め、肺臟に布き、腎臟に泄し、一身に漑ぐ」即ち血と云ふものは脾で出來てソレから心臟の中に聚ツて往き、肝臟の中に藏める、ソレか

ら肺の中に普く撒き散し、腎の臓で泄らし一身に漑ぐ。斯様に血は五臓及身體中を環るもので有と申して有ります、殆んど此説は今日の生理學者から見ましても間違ッて居らぬと云ふて宜しい、従來の生理學で血の出來る處、血の中の一番大切の部分赤血球の出來る處は、脾臓の中で出來ると申し來りましたが、近頃は又赤血球は骨髄の中で出來るものであると云ふ事を西洋でも申して居ります、ソレから血が心臓に聚まる一身の血はドコの血でも心臓を環らない事は無いと云ふ事は能く今日の生理學上にも適ッて居ります、肝臓に藏めると云ふ事を申しますが、此肝臓に藏めると云ふは冬期穀物を取りまして藏に入るゝ如く血を肝臓に收める、肝臓は古い血を壊す處となッて居りますから、則ち肝臓の藏に收めると支那人が考へたのかも知れませぬ、ソレから肺臓に布く是は至極善い説で御座います、肺臓と云ふ處は細かに血を撒き散す處で御座いまして至極今日の生理上にも能く適ッて居る、肺臓に撒しまするので初て呼吸が出來るので御座います、腎の臓に泄らすと云ふも其當を得て居る、腎臓に於きまして不用の部分を漉し出して仕舞ひます、則はち水になッて出ます、其他全身を其血が循環まして種々なる作用をなすと云ふ事を申して有りますが是は爭はれない事で、若し血の循環が片時でも止まりましたならば、同時に他の作用も止ッて仕舞う、其例を引いて御話を致せば、縊首或は咽喉突の如き自殺を致しまする時分に首を縊り或は咽喉を突きます是れは首を縊りて息の根を止るのか、又は喉を突いた爲めに息を洩れると云ふよりは寧ろ大切なる頭脳の血が通ふて居りまするのを、途中で縊る爲めに血液の通ひが止と中した方が適當で御座います。何故なれば縦令自殺を致し美事に氣管を切ッて居りましても生きて居りま

すが、咽喉の左右に御座います太い脈管を切りますと、心臓から脳に往く血が洩れて出て仕舞ひますから死ぬので、決して自殺をする時に氣管を切ッて息が止まると云ふのでは御座いません。故に血液の環りが一寸でも止まると死のであると申す方が至極善いだらうと思ひます、是れまでが血のからだ中に分配致して夫々の作用をなすと云ふ御話しで御座います。

ソレから血は水穀の中の精であると云ふ事を前に申して置きましたが、血を製造するには水穀の精何でも滋養分を多量に食べませねば製造することは出來ません、ソレ故衛生家が皆様に向ッて滋養物を召上がれと御勸め申すので御座います、併し何程滋養物を召上ッても、腸胃で消化する力が不充分で御座いましては、矢張り血を製造する事が出來ませぬから、腸胃の消化が大切で御座います、成るべく消化の善い柔らかきものを召上がれと云ふので有る、斯様にして腸胃の消化も能く滋養物も程能く食べて居りまするると絶へず極く上等の血が出來まする、上等の善い血がからだの中を普く循環ッて居りますれば、誠に肉體も健康かで居ると云ふは最早述ぶる迄もなき事で御座います、其中に漸々惡くなりました血は心臟から肺臟に送ッて清潔にする、是等の事は少しく生理の書を讀みましたものは疾くに御承知の事でも御座いますし、當今は小學校ですらも教へますから此邊は省いて申上げませぬ。

私は今迄申し述べましたる血と云ふものを世間に融通致して居りまする貨幣に譬へたならば極めて面白いで有らうと思ふて居ります、赤血球は赤いと申しても顯微鏡で見ますると殆んど黄金色をして居ります、故に是も古へより尊んで居りますから金貨幣に擬し、又白血球は白色で御座いますから銀、銀

貨にでも喩へて見たら宜しからう、ソレから血漿是れは貨幣に例へたくも水の貨幣も無いから貨幣に喩へ様も御座いませんが、小い錢銅貨にでも喩へたならば宜しからうと思ひます。何故かなれば白血球赤血球のみでは餘り濃過ぎてからだ中に環らない、ソコデ血漿に依て之を適宜に稀釋め初めてからだ中に限なく環る様になるので御座います、乃ち金貨銀貨は餘り貴くて迚も貧窮人の手には還入ませぬから、銅貨と云ふものを拵へて之を稀くして貧窮人の手に入れる事が出來る、ソレ故血漿は銅貨、白血球は銀貨、赤血球は金貨として金銀銅の貨幣が釣合がよく身躰中を環る、全く金滿家の手にのみ止まつて居りませずに貧窮人にも能く行渡ツて居りまする如く、からだ中にどこにでも滯りなく血液が融通して居るのが身體の最も健康の時の有樣で御座います、故に私は之を金銀の融通に喩へて血液經濟と申します、常に血の繰り廻しが能く附いて居らなければなりませぬ。

然るに此繰り廻しが御婦人方に於ては毎月狂ます、所謂例の月經が御座いまして月に一度は必ず狂ひます。殊に御妊娠中杯は大狂ひに經濟に狂ひを生じて參ります、御承知の通り十月間も滯ると云ふ譯になりまする、成程支那で「婦人は血を以て主と爲す」と云ふたのは決して虚言でない、男女とも血と云ふものゝ必要なる事は勿論の事でありますが、婦人は妊娠中は十ヶ月も滯り其後といへども小兒に乳を與ふる間は始終狂を來しますから「婦人は血を以て主と爲す」と申したので決して支那人が偶然な事を申したのでない、確かに據り處の有ツて申した事と考へられます。

ソコで經濟上融通の恐しくなりました時に、御婦人方は血の融通が惡くなつた時の用意が豫ねて致して

座います、男の身體には融通の悪くなる事は御座いませんが、併し融通の悪くなつた時には身代限を仕なければならぬやふになります、然し御婦人方は融通の悪くなる事も豫め極ッて處置の附く樣になつて居ります、男と女と比較して見ますると血を失ひし時即ち何か損耗をして所有金を失ひし時に當ッては、男子は非常に衰弱りますが、婦人は左程弱りませぬ、又損耗をしても元の通りに補ふ事も婦人には容易く出來る樣になッて居ります、併し婦人は何程損耗をしても回復しが附くと云ふ御考へが起りましては私甚だ迷惑致します、何故なれば長血或は婦人方に多くある走り痔杯を煩た人は、色蒼褪めて動悸が致し息切れが致します。サウ云ふことは皆樣も御承知て御座いませうが、息切れ立ち眩みなどの致しまするのは、恰も所有人これを失ッて經濟が取りきれず、所謂身上の左り前になッた時の有樣て御座います、御婦人方の病は多く血の道……私は未だ血の道と云ふ字の起りに就ては不穿鑿て御座いますが、或は血の滿と「みつると」云ふ當字を書いて有りますが是は血が滿ちた爲めに起るのてなくして却て血を失ッた時に起る、概してサウとは申しませぬが、先つ大概の世の中の血の道は財産を失ひし時の徵が御座います。財嚢の空らになつた時の病氣を血の滿と書いてはドウも意味が通じません、先づ世間て申す血の道は血を失ッた時の徵と御承知下すつた方か安心で有らうと存じます。

さて血の道と云ふ病氣は種々の症を起して眩暈し、氣か鬱ぐ是も血か少くなりまして其爲めに神經の作用か不充分になつて參りまして活潑に働く事か出來ない、總べて何ても血の道の方に引寄せて仕舞ひます、眼が霞む是れは血眼てあらふと云ふ樣に血と云ふ事を申すのは、最初に申した婦人は血を以て主と

なすと云ふ支那の說から起つた事に違ひない、總べて婦人のからだに起ッて來る病氣は血液か乏しくなつたから起ると考へれば間違ひはない、隨分世間には病症に血が手傳ッて居る抔と云ふぼんやりした言葉を用ゐて居るが、併し此事に就ては未だ確かな解釋を下す事は私には出來ませぬ。

古にしへより人の血にもせよ其他の動物の血にもせよ、血と云ふものは清いものであるとも考へて居りますが、又穢ないものであるとも考へて居ります、世の中の開化致しまするのと共に、人畜の血を以て清ひものと考へて又穢ないものとも考へて居ます。其證據は何か證文を致しまする時神掛けて誓ひを立てまする時分に、大切の證文の上に血を灑ぎなどしまする、歐羅巴抔に於ましても獸類を犧牲に致し、其犧牲の血を絞ッてからだに塗り、或は其絞ッた血を飮むと病氣が癒る抔と二千年以前は申して居りました、支那でも鐘の出來上りました時に之を釁りすると申して器物に血を塗ることがある、又兄弟の義を結ぶ時に互に血を啜ると云ふ樣に神に祈り、謹んで致す事には毎も生血を出して居ります、是等の事を以て見ましても生物の血は穢ないものでない樣になつて居ります、然るに血と云ふものは大不潔のもので在ると云ふ考へも起りまして、何でも血と云ふものは大不潔のもので有ッて神佛の前に血の汚れが有つては恐れ多いのみならず公けの用向きも血の穢れの有ものは、執ッてはならぬと云ふやうに申して居ります、例之ば夫が役所で公務を執りますにも家内が產を致しますると、產穢或は血穢と申して公けの業務を取る事を忌むやうに同一家の中に血の汚れが有りますと業を休むと云ふ位ゐでございますから其時分は血と云ふものは、汚れたものと見たに違ひない、又支那の書物で見まするど最も人の不潔と

致して居りまする、婦人の月水を以て藥に用ゐた例杯も御座います、支那人は實に奇妙な事を致します色々なる不潔物を以て藥に用ゐたものが幾らも有ります、是れは支那でも決して余計用ゐた譯でも御座いません、矢張り支那でも血は不潔物と致して血の汚れの有る者は、藥を調合してはならぬと云ふ事を申して居りますから此方が何れ正しいのであらうと思ひます、我國で古へ宮中に尙藥と云ふ女官が御座いました、其女官が御上に上げまする御藥を貯へて居ッた、此御藥を調合して上げて居ッても其頃若し血液を不潔物と致しましたならば躰に汚のある時だけは謹んで御藥を扱はなかッたで有ろうと思ひますが、月經の時には御藥に手を附けなかッたと云ふ事を非いたものはまだ見ませんが、或は在樣な事の必ず有ッたらうと推察されます。其外俗間でも知ッて居りまする事で、婦人月經の穢れ有るものは酒を醸造しまする酒室、或は麴室に這入る事が出來ない事として居ります、近頃の亞米利加の醫事新聞に載せて有りましたる、月經の有る看護婦は大手術の室に立ち入らしめずと出て居ります、月經のある婦人は手術杯を致しまする室に立ち入ッてはならんと云ふ事は、已に一二年前或外科醫が申して置ましたが、此頃になッてからだが穢れて居るものは手術などの場所に立入ッてならぬと云ふは、成程尤もなる說であると申してありました、段々生理學衛生學などの進步するに從ッて古より支那あたりで申しました事、或は我國俗間に傳へて居りまする事も、學理に照して役に立つやうになります、決して支那人がボンヤリした事を申したのではない申すだけの理由が御座いましたのを近頃尙ほ一層委しく明かになッたので御座います、然らば月經の爲に穢れたものが手術の時に立入ッて惡いと申す譯はドウ云ふ譯である

と云ふに、一躰月經と云ふものは大不潔のものであツて始終其部を清潔にして居ることはドウしても出來ない、ソコに「バクテリヤが」還入ツて生育して居る故に、外科醫者病婦共身躰を浄めて後手術にかゝるべき所に其の「バクテリヤ」の附いて居る者が近寄りましてはソレが爲めに大切の手術を誤る事があるから、立入ツてならぬと云ふ事が近頃になツて確かに解るやうになツて參りました、既に衞生の方で清潔法の事を非常に大切に致して今日の如くに實際に行はねばならぬ場合には、是れは忌まねばならぬと云ふことは確かなる證據であります。

古い所の考へにすると、からだの中に悪血の塊り或は滞りと云ふことを世間で申します、支那でも悪血と云ふことを頻りに申します、成程今日の生理學病理學に據ツて見ましても悪る血と云ふことはありますが、ソレは傳染病の毒其外の毒物が血の中に交ツて居れば如何にもソレは悪る血で御座いますが、其外に決して悪血と云ふものはからだの中に無いやうに仕掛けてあります、少しでも悪いものが血の中に交ツて居りますれば、ソレは外に取除けて仕舞うやうな仕掛けになツて居る、併し前申す如く傳染病の毒が全身に行き渡ツて居りますれば、悪血で御座いますから愈々傳染病の毒か血の中にあると云ふ事が知れましたならば、速に身躰の外に逐ひ出して仕舞はねばならぬ、何故私が悪血に就いて殊更に御話をするかと云ふに、從來の考へで悪血が滞ツて居ると云ふて、頻に血を取ります例之ば長血の婦人は早く止めると宜しくない、悪る血であるから出る丈は出した方がよいと信じて居る者が大變に危いことで御座います、又其外醫者によツて悪る血があるからと頻りに血を取ツて居る人がある、先日も或治療家に聞きました所が、大切の人間の血を悪血だと申

して妄りに取りましたので、其病人はヘト〳〵に衰ッて幸にして生命を限さないと云ふばかりになつて仕舞ひました、實に斯の如く悪血なりとして之を取り除けて仕舞うと云ふは誠に危険なる譯で御座います、醫者が斯くの如き事を致しまするのも實に申し譯のない話しで御座いますが、又此事を信ずる素人方も平生悪血などゝ云ふことのみを耳に挾んで深い考へもないのは、詰り衛生會の講演などを御聽きにならぬからさういふことも起るのであらうとをもふ、悪る血〳〵と云ふ事を信じて居りまするど大切の失ふべからざる血液を無くして仕舞ひまして余程危いことで御座います。

ソレから人畜の血を以て傳染病を防ぐと云ふ新らしい説の方に移ッて申上げます、衛生學者の研究にいたしまするど、人畜の血は傳染病を防ぐ力がある、然らば其血を取りまして藥にして飲ませるのかと云ふに、決してさうでない血の中に存在致しまする一部分を取りまして、即ち血漿と云ふ水を取まして、聊かばかり人間のからだに移しまするど云ふとソレが大層の作用を以て傳染病を豫防することが出來ます、即ち牛のからだから皆様も御承知の痘苗と云ふて、小犢に出來た痘瘡の中の奇麗なる水を取ッて種へます、之を膿を種へると思召すと大違ひで御座います、或は少し位ゐ血が混ることも御座いますがアレは膿血ではない、小犢の腫物の中の水の部分だけを取ッて聊かばかり人間のからだに移しますと、此五尺の身躰が天然痘に罹るのを防ぐことが出來るのであります、牛痘をして居る牛の身躰の血漿が余程に豫防力を有ッて居る、又或人は血の中の白血球が傳染病を豫防する力を持ッて居る、是は傳染病の毒が「バクテリヤ」であるとすると、其「バチルレン」が我々のからだに這入ると白血球が待ち構へて

喰つて仕舞うと說き明した人も御座います、兎に角赤き球は傳染病を防ぐに就いて別段に其効はなくして、白血球或は血漿と云ふ流動躰に効能があると云ふことを申して居ります、又血漿で傳染病を豫防することが出來るなれば、既に其傳染病に罹りし病人が血を以て癒すことが出來るかと云ふに、現に近頃では癒すことが出來ると云ふ說が起ッて居る或人は犬の血の中から血漿を取りまして傳染病に罹ッた人に注げばどうであるか、或は羊の血を取ッて注込めば癒ると云ふ例を顯りに研究して居る尤も是等に用ゐまする血漿の分量は種痘を致す如く一寸と針の先で突くばかりでなく、余計に注き込まなければならぬ、此樣に段々衛生學の研究が積んで參るに從つて最初は無効のものと申して居ッた血漿が、極めて有用のものになッて、少し計りの物で人一人の生命を救ふばかりでなく所謂一粒万倍と申して、多人數の生命の救ふこのと出來るやうになりた、ソレ故是迄も成績の確かなる種痘などに就ては、快く其種痘を受けて、其種を又他人に移し、種へさせなければなりませぬ、また確かに解からぬ中は御勸め申すことも出來ませぬが、種痘の如きは、今日は既に誰も爭はぬことで、一ツの痘苗から數百人の生命を救ふことの出來る價値が、此血漿にあると云ふ事が解ッて參りましたのであります。

是まで述べましたことを摑摘みて申すと、人が健康であらうと思ひますには、先づ以て滋養の食物を取り、血液の缺乏せぬやうに致し、又運動をよくし、血液の循環をよくし、血液經濟と云ふことに注意をして、血が惡るくならぬやうに、毒のないやうなものを食べ傳染病の感染致さぬやうに致し、種痘の如き、確かな法は進んで之を行ひ、又人にも勸め追々衛生學の方で發明も積みて參りましたから、

新らしき確實なる良法が出來ましたならば必ず之を試みて、啻に自分一人の健康を保存するばかりでなく、他人の健康をも保存するやうに致すのは、衛生會の業には至極適實のことゝ思ふて、血漿療治の事をもザツト申したのであります　（完）



寄書

肺病豫防養生法（其八）

醫學士　竹中成憲君

運動之事

夫れ身體は其餘りに肥ゆるも亦餘りに痩せるも共に病なり世人は兎角肥ゆるを以て益々健康に趣くものと信じ意氣揚々たる者あるは醫師として笑はざるを得ざるなり又或る種類の人々の考に據れば凡そ人社會に立つに痩せたるものは肥たるものに比し威嚴少きが如くに思ふものあり故に痩せたる人の來りて肥ゆるの法を知らんと望むものあり痩せたる豪傑なきにあらざるも人の好は様々

然れども或部類の人々が此く思ふも無理ならぬ事あり本誌「注意の部」の中體格に關する部を一讀せらるべし

抑も身體の肥大するに二個の別あり

（甲）筋肉の增加するもの

力役者（人足、車夫）柔術家等の如く腕力を使用して筋肉其ものゝ增加するもの、柔術家には痩せたるもの多し

（乙）脂肪の增加するもの

御殿女中、下女、遊女等の如き聞く肥へたる者其實「あぶら」の增したるのみにして肉其ものの增したるにあらず酒客の肥へるも是なり俗に

「水ぶとり」と云ふ力士は筋肉も少きにあらざるも實は脂肪多きなり奧樣の或る部類にも之あり甲は健者なれども乙は實は病氣なり

此病を肥滿病又は肥胖病又は脂肪過多症と云ふ

此病に罹るときは心臟弱くなり又中氣、卒中等に罹り易し

古來此病氣の爲め困難するもの少からず

蓋し人は運動せずして多食するときは肥ゆ菓子最然り

ワイル、ミッチェル氏肥滿法なるものあり其要點は患者を床の上に安臥せしめ刑身の勞を禁じ食餌は十分に之を命じ按腹、按摩、電氣を用ゐて運動に換ゆるの法なり

此法に據て痩せたるものは肥ると雖身體に筋肉の增加する事少なく主として脂肪を堆積するなり

鳥を賣らんとして之を肥やさせんとせば鳥の足を板に固定し運動出來ざる樣に爲し而して大食を與ふれば肥ゆ

豚も亦之を賣る前に肥へさする爲め一室に監禁し食を與ふ皆鳥豕商の實行する所なり

御殿女中の如き甘味を多食して運動せざるもの亦然り

遊女の肥滿するも此理なり

以上の如く肥ゆるの法なきにあらざるも此肥滿は價値なし何となれば上記の如く單に脂肪「あぶら」の增加するのみにして筋肉の增加するものにあらざればなり俗に所謂「水ぶとり」と稱するもの是なりとす

然り而して此肥滿症は一種の病氣にして之に陷らざる樣吾人は注意を爲さざるべからざるなり本症に罹れば心臟衰弱して早く死する事前に述たるが如し

故に吾人は此肥とり方を避け專ら其の筋肉の發生を望まざるべからず

如何にせば筋肉發生するや他なし車夫、百姓總て勞働者を見よ彼等は終日力業に從事しつゝあるなり而して食物は如何ん彼等は米と澤庵漬又は鹽鮭の一片に飢を凌ぎつゝあり

牛乳、鷄卵、鳥肉、牛肉は彼等欲せざるにはあらざるも稀に馳走として口にするものにして彼等の身體構成に絶對的必用なるものにはあらず

我國にては腦力を以て世を渡るものは腦のみを使用して體を使用するを忘れつゝあり西洋人は腦を使用する傍ら必ず多少の身體勞働(運動)を爲す玆を以て多くは神身共に健全善く大業に堪へ大發明をなす實に

「健康なる精神は健康なる身體に宿る」

「健康は幸福の母」

等の金言に背かず

左れば吾人は須らく力役者の内情に鑑み食物の如何を顧みず專ら筋肉の使用即ち運動を爲すべし而して凡そ運動の事を醫に計るときは醫は先づ散歩すべしと言ふなるべし

然れども元來運動なるものは一定の有益なる目的又は快樂あるにあらざれば言ふべくして行難きものなり散歩する用向なきときは之を爲し難し

實に運動なるものは口に之を稱ふるは易く醫師自からすら之を患者には證明するも自身は之を爲さず何か目的あるか然らざれば其運動より或る利益亦は快樂の生ずるにあらずんは持續し難し故に予は左に快樂亦は利益の相伴ふ運動を示すべし讀者幸に予の精神のある所を察し予の考案をして空ふせずむば予幸甚なり

一室内を自から掃除する事大に運動となる就中雜巾

掛まで自から爲すべし
一薪を割る事
一米を搗く事(福澤先生法)
一馬に乘る事
一入浴の際、務めて自身に身體を洗ふ事
是三十分以上の運動となる
一貧なるものは新聞、牛乳配達を爲すも可なり
一踊(おどり)舞(まい)大に宜し
(西洋の舞踏は病既に萌したるものには激烈に過ぐ)
一拳(けん)宜し
一自轉車は大人には宜しきも幼年のものには宜しからず此の爲めに脊髓彎曲症(せむし其他)を起す事多し
一舟(ボート)漕ぐ事
「ボート」よりも和舟を宜しとす西洋の漕き方は身體上半部のみの運動なれども日本の艪は全身の筋肉與りて働くものなり此排洋採和の説は恩師ベルツ博士の説なれども予は以前より此く思ひゐたり
彼の電話を發明したるベル氏昨年我國に來り此艪を見て感ずる所あり一個を購ふて鄕里に送れりといふ
一夏期は水泳をなすべし
一女子は舞(まい)踊(おどり)の外機(はた)を織る事大に宜し
座するものゝ運動として玄米一升を徳利へ入れ之を「すりこぎ」の如き棒を以て搗くの法あり一日の己の食を作ること易し此法は勝海舟先生も白米高きとき母の爲めに行たりといへり
寒國に在ては氷辷(スケーチング)を爲すべし只極めて幼少なる兒童の之を爲すは或は足關節の異狀を呈することあるべし、軟弱の小兒には餘り宜しからず
右は自體筋肉の運動なれども玆に又肺の運動(獨逸

語にて（ルンゲン、ギムナスチック）英語にて（ラング、ヂムナスチック）なるものなり是肺を强壯ならしむるに最必用なるものなり

（未完）

正誤　前號此欄の末尾左記の一章は云々と細字を以て附記せしは「クレオソート」の説に入るべきものを誤て掲載せしものなり讀者之を恕せよ

衛生叢談



皮膚病の話　（其六）

在大學　T. S.

いぼ（疣）の話

いぼと云ふは至て多き皮膚病の一つにて百人が百人殘らずとは行かずとも疣なき人は殆んど數ふる程の次第なるが偖て素人が呼んで疣と稱する者の中には色々の者を含み居る也、今茲に素人の所謂疣を二種に分ち傳染するいぼと傳染せぬいぼとに區別すれば

傳染するいぼ

此種類のいぼは主に顔、襟、頭、胸、耻部、手足の背面等に生する者にて其大さは止め針の頭位より豌豆位の大さにて之に觸るれば滑らかにして硬く色は殆んど通常の皮膚と異なる事なく只少しく隆起するのみ此いぼの特色は其頂上に少しく陷凹せる孔口を存する事なり此いぼを指端にて壓すれば此孔口より白き豆腐渣の如き物の溢出するを見る可し、

此いぼは實に容易に傳染する者にて小兒等は其遊び友人の中に一人此患者あれば其一群の小兒は殆んど之に傳染するを常とす、現に過ぐる年東京の或る孤女院にて一人の傳染性のいぼを病める小兒を入院せしめしに瞬く間に院中に流行し遂に數十名の患者を見るに至れりと、此他又青年が柔道取組の際傳染し

或は乳母が嬰兒より傳染するなとは屢々見る所なり
治療は別に六ケ敷事なし、此いぼの傳染せるを認めなば速に指端にて內容を搾り出し其跡を石炭酸水或は升汞水にて拭ひ置けば可也、

傳染せぬいぼ

此種類のいぼには色々のものを含めども其主なる者は疣贅なり

疣贅

疣贅は諸姉の知らるゝ如く手、顏、頭等に生する皮膚の隆起にして極低き者もあれど或は稍高くして半球狀を成す者もあり、大さも亦種々なれとも先づ豌豆大の者を通常とす、疣贅は諸所に散在する事もあれと又多數族生する者もあり、其表面は平滑なるを常とすれとも久しく存在せる疣贅にありては其面凹凸を呈し且つ同時に變色して暗色となる者もあり、
疣贅は有りても別に害にもならざれども何となく氣にかゝる者なれば速に取去るを可とす、
治療は疣贅は自然と消滅する事もあれど若し然らざる場合には鋏にて切るとか或は鑷子にて抓搔するとも或は又發烟硝酸或は石炭酸の如きにて之れを腐蝕せしむるも可なれとも若し顏等に存する疣贅にて以上の方法にては瘢痕を殘すの恐れあれば電氣療法を用ゆるを可とす、電氣にて取去りし疣贅の跡は十日間程は赤色の瘢痕を殘せとも漸次退色して遂に通常の皮膚に復する者也、勿論施術の巧拙により其結果にも亦優劣ある事は豫め期し置く可し、

纖維胞

纖維胞の小なるものも亦素人は之をいぼと云ふ也、勿論大なる纖維胞は即ち彼のこぶ(瘤)なり、纖維胞は皮膚下の結締織の病なれば其少なる者にありては外皮は特別の變化を呈せず形は極低き隆起を成すものもあれど又強くは皮膚上に突出するものもあり、

之れに觸るれば多くは柔軟なれども屢々又硬き者もあり、出來る場所及び數の如きは一定せず、彼の橋本醫學博士の報告せられし一患者の如きは全身殆んど纖維胞の鈴生にて其數大小合して四千五百三个ありしと云ふ、勿論之等は万國を通じて稀有の事なるべし、纖維胞は腫瘍の一なれば疣贅等と異なり之れを發見せる場合には速に治療を加へざる可らず治療は外科的に皮膚を切開して之れを切取るの外なし其他俗ほ素人が誤解していぼとなす者多けれど之等は他日述ふる事とすべし

（未完）



生命と調理

Dr. N. N.

生命即ち人間で生命がなければ人間の身体も木石と異る所なし。偖此生命を保存するには是非共食物が必要である、食物の生命に於る、恰も炭の湯に於るが如くにて炭の燃ゆる間こそ湯は絶えず沸騰すれども、一旦炭燃え盡せば湯は忽ち冷えて元の冷水となるなり、是と同じく人の生命も食物なくして之を保存する事能はざるは明かなる事實なれど、偖此食物が生命を保存するは是決して單簡なる事に非ず、食物と一口に言へば口の中に投げ込みて咽喉を通して腹の中に納むる物と考ふる人もあるべけれど、其實決して斯かる單簡なる物には非ず、食物が口より入りて食道、胃、腸等を經て糞便となり肛門より出づる間に受くる變化は實に絶妙不思議なるものにて、先づ食物が口に入れは、此には唾液ありて食物中の

澱粉分丈は其一部唾液の爲に消化せられ、胃に至れば胃液といふ物ありて此液の爲に食物中蛋白質の一部は消化せられ、胃より腸に至れは、玆には又胆汁膵液等の如き消化液ありて胃液、唾液等にて消化し得ざりし食物中消化され得べき物は大抵消化せらるゝなり」

斯くの如くして消化せられたる食物は、胃腸を經る間に漸々に吸收せられて、食物中消化する事の出來ぬ物や消化されべき物でも消化する暇のなかつた物は、遂に糞便となりて躰外に出さるゝなり。是等のことは今玆にくわしく述ぶる迄もなく、本雜誌に於て度々諸大家の講述せられたる處にして現に近き處にはて本誌百廿六號に北村學士の講演あり、又百廿五號には恩田氏の講演あり、百十九號にはS.T.學士の講演も記載しある事なれば、諸姉も審に御承知の事と存す」

以上にも述べたる如く食物を吸收するには之を消化する事が必要なり、之を消化するには唾液胃液を始めとし諸種の消化液が必要なる事は明なり、偖此消化液は如何なる物なりやといふに皆人躰の中に消化腺といふ器官ありて此處にて製造せられ口なり胃なり腸なりの中に注ぎ出さるゝなり、例へは唾液は下顎や頬にある唾液腺といふ消化腺に於て造られ、胃液は胃の壁にある胃液腺にて造られ、胆汁は肝臟といふ腸の脇にある腺にて造られ、膵液は膵といふ同じく腸の脇にある消化腺にて造られ、腸液は腸の壁にある腸線にて造らるゝが如し」

偖此等の腺にて造られたる消化液が絶えず口なり胃なり腸なりの中に注ぎ出されつゝあるかといふに決して然らず、勿論唾液の如きは殆んど常に口中を濕し居るとはいへ、是とて物を喰ふ時と喰はぬ時とは其出方大に異なるなり、只に出方の異なるのみならず

第一其造られ方異なるなり、食物が口中に這入つた時は勿論假令入らぬ迄も甘味の食物を目擊せしのみにても唾液の造られ方は大に增加するものなり、實に口汚なき話なれど蒲燒の香を嗅げば思はず口中に唾液の溢るゝことは能く俗間にて言ふ處ならずや又同じ食物にても味のよき物と惡しき物とにては味のよき物の方唾の出方多きは人々の經驗する處なり、例へば同じ餅にても只燒きし物と附燒にせし物とは唾の出方の同じからざるは申す迄もなき事なり、唾の出方多ければ其食物の消化方の宜きは明なる事なり、此事は只唾液のみにあらず胃液にても膵液にても皆同じ事にて犬等の如きにては、既に食物を見しのみにて、唾液は勿論胃液迄も夥しく胃中に出で來る事は有名なる事實にて、現に醫學の方にて食物の混らぬ胃液を研究するには、犬の胃に孔を明け置きて後犬を斷食させ、之に甘き食物を見せびらかす時は管より食物の混らぬ胃液の流れ出づるを見るなりされば食物を消化し易からしむるには滋養分多くして消化し易き食物を撰ぶは勿論の事なれども、之に加ふるに此食物を調理するに充分注意して、其食物の可成味のよきやう、可成香よきやう同時に又一見して如何にも甘きやうに調理する事必要なり、實に同じ「きんとん」にても、美しき皿の上に體裁よく弁べたるものと、折等につめて押しつぶし、恰も雜炊の如くなりし物とにては、之を食する人の愉快を感ずる度に於て、其差月鼈も啻ならず、隨ひて其消化せられて吸收せられ生命の保存を營む點に於ても差異なかるべからざるなり、是實に調理法の吾等生命に非常なる影響を及ぼす所以なり、近來諸雜誌を始め新聞紙等にても頻りに衛生の道を講ずる事となりし以來人々の滋養分を求むるに鋭意となりしは誠に賀すべき事なれども、間々其眞意を誤解する人あり

て、只に滋養分あればよしとの考にて、牛乳は御座れ肉は御座れソマトーゼは御座れペプトーン、チストフ、ポビナイン、等と有りとあらゆる滋養食料を腹中に投じて得意然たる人あれ共是大なる誤なり、我會員諸姉は此點に注目して調理法の研究を怠り玉ふ可からず、殊に病人の食慾少なき人に向ひては調理法の功力は實に驚く可き物なり、聊か感ずる處ありて筆しぬ。」



看護法

普通看護法（其四）

在大學　T・S

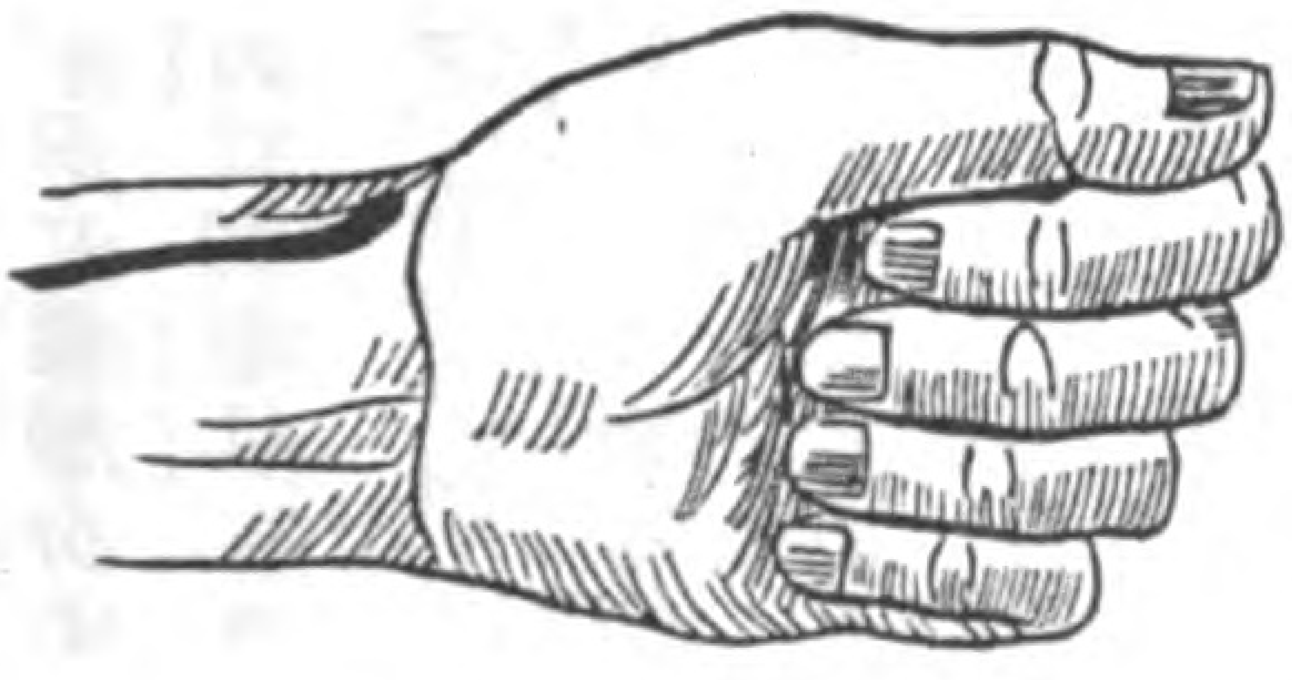
脉搏の事（第四）

脉搏を計る事も亦躰温を計ることゝ同じく大切な事でありますから是非躰温と同時に脉搏も計る事をお忘れになつてはなりません、健康な大人の脉搏は一分間六十から八十位搏ちます、小供は大人に比ぶれば遙に多くして十四歳では八十六前後六歳では九十八位三歳四歳では百八倍二歳では百廿位一ヶ月以下の赤子にては百四十位であります、老人は七十から九十搏位であります、勿論健康な人でも何かに感動じますとか身躰を強く動かしました後などは脉がずつと増加するもので御座います、然し是は一時の事で直ぐ元に復ります

是は健康な人に就ての事で御座いますが病人にては病氣の種類により脉搏が大層増しましたり又減じたり致します、さて如何いふ時に脉が減ずるかと申しますのに一種の心臟病の患者や腦膜炎や黄疸の患者や腹痛のある時や病人の疲勞が甚しき時や多くの病

氣の恢復期には脉が減少するものであります、それから脉の早くなるのは凡ての熱病患者や心臟病の一種に於て常に見る處で御座います

脉の早い遲いの外に規則正しいとか不規則とか大いとか小さいとか硬いとか柔いとか色々の事が御座いますが之を見分けるのは少し六つヶ敷御座いますからお醫者にお任せになつた方が宜しう御座います、只看護をなさる方の是非御存知でならなければならないのは脉の數を計る事で御座います



脉の數は如何して計るかと申しますのに手首(手關節)の拇指の根元の處に骨の隆起が御座います、此隆起の內側で下の處に撓骨動脉といふ血の管が御座います、此圖は頂度手首の處を描いたので御座いますが黑く大い棒が即ち血管で御座います、此血の管の上に右の手なり左の手なり都合のよい方の手の指の先端を二本か三本輕く乘せるもので御座います、但し拇指は使はない方が宜しう御座います、指を乘せましたらば他方の手で時計を持ちまして凡そ十五秒時中に搏つ脉の數を數へて此に四を乘けて一分時中に脉の數を數へるので御座います

一寸御注意迄に申上げて置きますが脉をとるのに御使ひになる時計は成る可くは音のしない時計が宜しう御座います、又かの競馬用時計といふ一秒毎に針の跳ねて行くのが御座いますが彼は脉をとるのには不向きで御座ります

呼吸の事

呼吸も亦溫度脉と共に是非計らなければなりません健康な大人は呼吸する度數は一分間に十六から廿回赤子にては四十回から四十四回位で御座います、其

ですから頂度脉搏と呼吸の度數との割合は呼吸を一とすれば脉は三半か四位の割合で御座います、勿論健康な人でも何か感動しますと身躰を使ひました時等には一分間廿四位迄になることは御座います、又病氣の種類に由りましては例へば熱病の人等にては呼吸の度數が甚しく增加致します、又病氣に由つては啻に呼吸の數が增加するのみならず呼吸する事が甚しき困難となる事があります、此狀態を呼吸困難と申します

呼吸を計りますには掌を靜に胸の上にあてがひまして時計を見ながら胸の動搖するのを數へるのであります、此際注意しなければなりませんのは手が冷たくはないかといふ事を確かめることで御座います冬の日等に冷たき手を患者の胸の上に乘せますと患者はビックリして急に呼吸が增します、又切角寢入つて居た患者は其爲に眠を破ることが御座います

又呼吸を計りますのには口か又は鼻の上に掌を翳して出る呼氣の觸るので數へても宜しう御座います

是で躰溫と脉搏と呼吸の事をざつとお話し致しましたから次に躰溫表を作ることをお話し致します

躰溫表を作る事

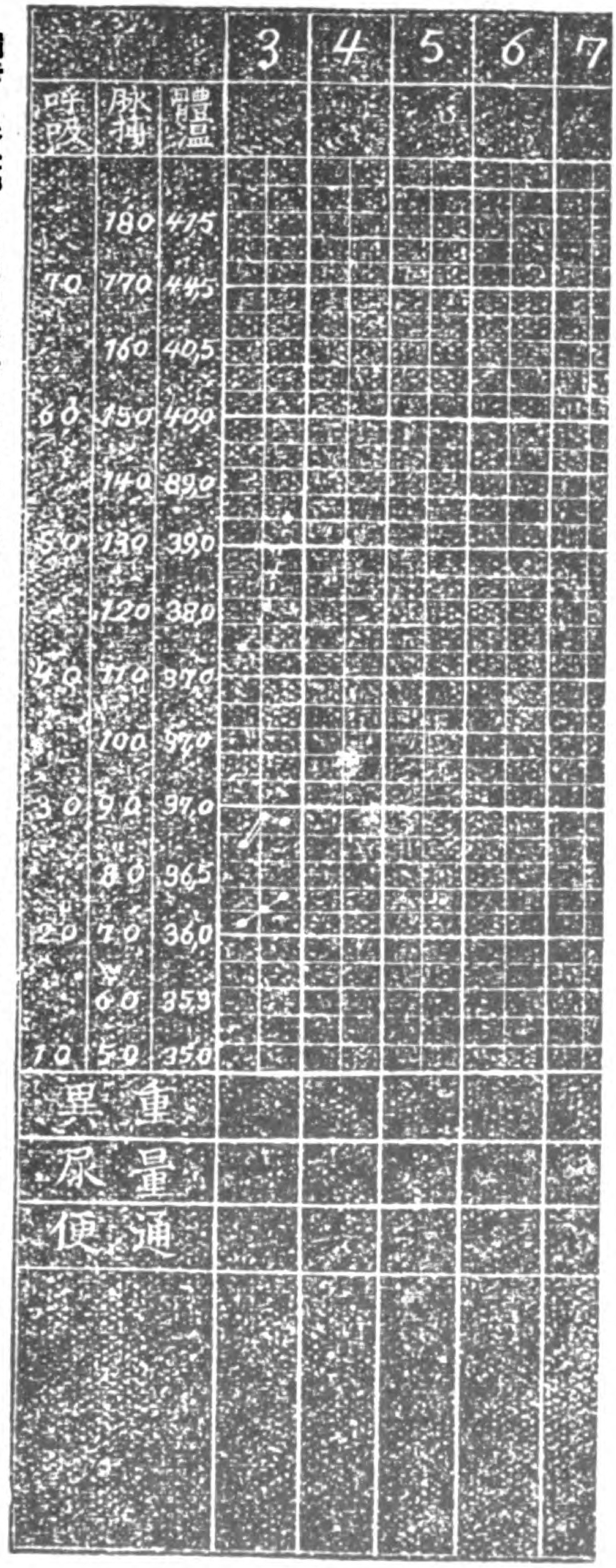
每日計りました躰溫なり脉搏なり呼吸なりその都度之を一定の紙に記入致しまして醫者が之を見ますると一見病氣の樣子がわかるやうに致さなければなりません

此に添へてありますのは躰溫表の雛形で御座いますが御覽の通縱と横とに筋が引張つて御座います、一番上の行に三四五六と書いて御座いまするのは此は日附で御座います、此表の患者は三日の日から躰溫を計り始めましたから其で日附が三日から初まつて居るので御座います、此一行の中には其日の內に計つた躰溫、脉搏等を殘らず記入するので御座います

それから此表を見ますと一行が更に細い筋で二行に別れて居ります、此は午前と午後とを分る爲に引いた筋で御座いまして丁度此患者では朝一度晝頃一度及び夜一度と頂度三度計たので御座いますから細い行の左の方に一つと細い筋の上に一つと右の方の細は行の上に一つと都合三つ點がついて居るので御座います

偖此紙に愈記入しますには鉛筆が二本要ります、即ち一本は青と赤との鉛筆で一本は並の黒の鉛筆で御座います、醫者の方の慣例で脉は赤い色で記し躰

體温表摸圖



備考（原稿は白地の處總て黒にして黒地の處總べて白なりしを改刻の暇なきを以て此儘になしぬ）

（原圖は上欄の呼吸は黒にてあらはし脉搏は赤、體温は青にてあらはしたるものなり）

温は青い色呼吸は黒い色で記す事に成つて居ります此表本の鉛筆を取りまして體温表の左の方に書いてある度盛りと對照まして頂度自分のつけやうと思ふ處に點を打つので御座います、而して此點と前に打つた點の間に細く直線を引つ張るので御座います、此表では三日の日の體温は朝が卅八度二分で晝が卅八度五分晩か卅九度二分になつて居ります、脉は朝が八十四で晝が八十八晩が矢張り八十八で御座います、呼吸は朝が二十一で晝が廿二晩が廿三で御座います凡て此表に記けて有るやうにおつけになれば宜しう御座ります

此外又體温表には大小便の事や其外の事も記入致すので御座いますが是等は此次に御話し致しまする排泄物の處で申述べます（體温表は藥屋に賣つて居ります）

排泄物の事

玆で排泄物と申しますのは、大小兩便の事や咯出物と申しまして、患者が咯き出す咯啖や血液の類、吐出物と申しまして、患者が嘔吐の時に吐き出します色々な物、及び汗等の事を申すので御座います、先づ小便即ち尿の事から御話し致します」

尿の事

尿は御存知の通り如何なる人でも日々排泄致しまする液體で御座いまするが、此が病人と健康な人とでは種々異つた所が御座います、從つて醫者の方では、尿を檢査致します事が大層必要で御座います。尿を檢査致しまして、其樣子で病氣の診斷もつけば、又病氣が如何いふ樣子であるかといふ事も分るので御座います。其でありますから、お醫者は勿論で御座いますが、看護をなさる方も、尿の事には充分氣を注けて頂かなければなりません」

さて尿に就て如何いふ事を注意すれば宜しいかと中

しますのに、先尿の量、次に其比重、色、溷濁つて居るか否かといふ事、及び尿の反應と其成分とを調るので御座いますが、先づ是に先ち病人の尿を取る事を御話し致します」

病人が起居自由で御座いますれば、別に面倒は御座いませんが、重い病人にて獨りで放尿の出來兼ぬるのになりますと、其々工夫を致さなければなりません、此には通常便器と申します物を用ゐます、便器にも色々種類が御座いましてブリキ、銅等の如き金屬で出來た物もありますれば又硝子で出來た物も御座いますが、男のには硝子で出來ましてヘチマの樣な形をして居りますのが尤も宜しう御座います勿論是には限りません、已むを得ない場合には、コップでも金盥でも又は口の廣いビンでも宜いので御座います。女のには通常靴のやうな形を致したのが出來て居ります。之をあてがいまして靜に尿を取るので御座います、又幼兒の尿を取りますのは誠に困難な事で御座いますが之には近來獨乙等で專ら用ゐて居りますゴム製の小兒尿器が尤適當で御座います

偖尿器を用ゐます時に注意を要しますのは尿器の餘り冷たくない事で御座います。冷たい尿器を患者の身軆に觸てますと、只に患者が不快の感を起しますばかりでなく、病氣によりますと此爲に放尿が出來なくなる事が御座います、此には尿器を使用致しまする前に、一旦湯で洗ひまして暖めるのが第一で御座います、尤急ぐ場合には尿器の身軆に接觸ます部分を柔き布片或は綿の如きにて卷くのが宜しう御座います、斯の如くにして取りましたる尿は直に一定の器に移し、尿器は直水或は熱湯で洗はなければなりません、又病氣の種類に由り消毒を致さなければならぬ場合には、石炭酸(四十倍の物)或は升

汞水の如きにて洗ふので御座います、但し昇汞水は決して金物の器に用ゐてはいけません、又長く使用しますと尿器に尿の沈澱物が附着してなか〱落ちない事が御座います、此時には稀鹽酸或は稀硝酸を尿器の中に滿たして置きますと自然に剝離る物で御座います

斯の如くして取りましたる尿に就て、前に述べました色々の事を調べるので御座いますが、先第一に尿量の事から申上げます

尿量を計る

健康な人が一日に排泄致しまする尿の量は一日大凡千立方センチメートルから千五百立方センチメートルで御座います之を日本の升目に計算しますと五合五勺から八合三勺で御座います然し此も時と場合で増減が御座いまして、夏の暑き日等は身體の水分は、大抵汗の方に出ますから尿の量は遙に少なう御座います、また冬の寒き日や澤山飲料を飲んだ後などは尿に量が増します、然し健康な人ではいくら増しましても決して三千立方センチメートル以上となる事はなく又いくら減じましても決して五百立方センチメートル以下となる事はありません、若し三千立方センチ以上或は五百立方センチ以下でありますれば此人は慥に病人で御座います」

偖て尿量の減じます病は如何なる病かと申しますと熱病の人や、心臟病、腎臟病等の人では減じます、尿量の増しますのは糖尿病の人や萎縮腎の人等で御座います、又急性病の人の快復期には通常尿量が増すもので御座います、

尿量を計りますのには患者が放尿致します度々に尿を尿器から一定の目盛のしてある器の内に移して置くので御座います、勿論是に限つた事は御座いません、瓶なりビンなりに移して置きまして之を「メ

ートルグラス」で計つても宜いので御座います計ります時間は通常毎朝計る事になつて居ります、則ち今日の朝尿を計りましたれば、それから後明日の朝迄又患者が排泄致しました尿量が即ち一日の量で御座います、尿量を計りましたらば之を體温表の尿量と書いてあります處に記入して置くので御座います」

（以下次號）

第二衛生叢談

小兒の入浴

夫れ皮膚は體温を調節する作用と一種の呼吸作用とを併有するものにして之れを試驗するに今動物の全身に漆を塗布し全く皮膚の氣孔を閉止したるに其動物身體不安となり呼吸困難を起し痲痺を發し體温著しく減退し一二日を出でずして斃れたり又人若し全身の表面の三分の二を火傷するときは必ず死す是れ皆な皮膚の呼吸作用を損害するに由て皮膚より排泄有害物其出る道を失ひ體中に蓄積するに原因する者なり蓋し垢は等しく皮孔を閉塞し蒸發を妨く者なれば害を及ぼすこと恰も漆を塗りたるもの或は火傷を爲したるものに異ならざるなり之れに由て皮膚を清潔に保つこと亦緊要なりと謂ふべし而して入浴は能く垢を脫し之れをして清潔ならしむるの要具たるに止まらず又能く其蒸發を促し血行を進め以て組織の發育を振起し神經を強壯にし寒冒を防くの効あるものとす故に浴後は自ら食慾進み心神爽快となるを以て總て小兒は其本性多くは之を好めり然るに往々之を嫌忌て止まざるものあるは者は何ぞや是れ母親の小兒の皮膚は甚だ薄弱なるを思はずして彼の漸くに堪ふべきが如き高度の温湯に入れ或は其惰懶に出て稀に之を行はしむるが如き不注意に依て遂に之を嫌ふに至らしめしに外ならざるなり

入浴の仕方

産後直ちに嬰兒を沐浴するは既に普通の習慣となり而して其初め一二回は產婆に之れを依賴するも胎兒の皮脂（產兒の皮面に附着する所の粘滑物）を脫除さしむる爲め脂肪油牛酪若くは鷄卵の如きを其皮面に塗布し以て浴洗するを良しとす若し此際顏面は別に淸潔の温湯を以て洗ふべし否らざれば不潔の湯水眼中に入り結膜炎を發するの恐れあるなり而して小兒六七ヶ月に至るの間は時候に拘はらず每日一回十分時間列氏二十七度の温湯に入らしむべし但し全身病患にして發熱するものは一時之を廢すべきも局處病の爲めに廢止するは蓋し稀れなりとす既に長じて第一切齒を生ずるに至らば温湯の溫度を低減して列氏二十四度に至らしむべし第二年に至りては冬の間は最早日々なるを要せず一週に三四回列氏二十三四度の温浴を行ひ第三年に至りては一週二三回にして足るへし但し夏季には每日ならざるべからず浴湯の温度は必ず寒暖計を以て計るべし是れ手覺に依るときは每回多少の差異なきを得ざればなり又浴湯を行ふは滿腹の時を避くべし宜しく食后一二時を經て行ふべし然るときは小兒大に飢を訴へ次て就眠するを常とするなり

天候寒く風烈しき日に入浴したれば必らず外出して身軆を寒風に曝すなかれ之れ感冒に罹り易くして氣管枝炎を起すの恐れあればなり故に成るべく夜間就床の前に入浴を行なひ直ちに臥床するを最も安全の法となすなり

急性の子宮內膜炎

之に子宮內面を被ふ粘膜の疾患にして屢々外來患者に觀る所のものなり然れとも婦人春期發動期（十五六歲）に至らざれば現出すること稀れなり

原因は多く月經時の不攝生（過度の運動身躰冷寒等

に）由る其他子宮粘膜の刺戟（藥物の注入醫師の手術等）或はコレラ、チフス、痲疹、天然痘、猩紅熱の如き傳染病后又は燐中毒痳疾にて來るものなり

此疾に罹れば初めは惡寒を起し發熱は余り高からずして僅かに數日を經過し下腹部に疼痛を感じ腰部を壓せらるゝが如き重き感覺あり子宮を腹壁より手にて壓し試むれば輕度なる疼痛を知り屢々尿意頻數を來たす

斯の如きも輕きものは二三日にして熱除り腹部の疼痛止み漸次治に赴くと雖とも他の併發病を有する場合或は起りたる原因の如何によりて危險に陷るもの亦少しとせす

故に右の如き場合に當りては宜しく身體を安靜に保ち緩下劑を用ひ便通を調へ尿意頻數にして數回上厠するも通尿少量なれば炭酸含有飲料（ラチムの如き飲料）を飲むべし又腰部に疼痛甚しければ温湯に溫潤したる布片を以て腰部を罨法すれば大に堪へうるものなり然して治に赴かざるものは醫治を乞ふべし

慢性の子宮內膜炎

之は急性のもの全く治に赴かざるもの終に慢性に變ず又子宮の血行に障害を來たすべき時に起り其他手淫等總て刺戟に因し又産后の不攝生或は流産の結果に於て發するものなり而して其症狀は第一水樣液の分泌或は甚しきに至りては膿液の分泌を漏らし時とすれば血液を混ずることとなり或は下血を來たし腹部腰部に疼痛を覺ゆ然して此疼痛は一定の時間を以て來らず全く不規則にして忽ち痛み暫時にして去るの性質を有す又毎月月經時に當り粘膜の破切したるもの血液と共に下るを多しとす而して患者は容易く怒り或は鬱する等の精神變調を發し神經の疾患を起すに至る斯の如くにして之れを放擲すれば全く不

治の症となり終に救ふべからざるを以て宜しく速に專門醫の診察を受け治療を怠るべからず」

妊娠中乳房の變化

妊娠の期少しく進むときは乳房に屈重なる感じを起し漸くにして其大さを増し乳首は著るしく突き出し且乳首の圍回の皮膚には着色して漆樣に黑となることは産をなされし婦人のよく知らるゝ處にして殊に皮膚の白き人は著るしく知るを得べし此變化を來したるときは決して復たび元の色に還ることなし但し次回の妊娠には前の如く著るしく見ることを得ざるべし玆に一の注意すべきは妊婦にあらずして往々乳房の腫大きくなることあり此の時には兼ねて痛みを發し乳首をサスリ壓すときは少し許の乳を出すことあり之れは月經時に當りて此の如き病を發することあり

又妊娠中は乳房の知覺鋭どくなることあり然るときは兼ねて灌水法即ち(イルリガートル)と云ふ器械にて冷水を乳房に注ぐをよしとす之を屢々するときはよく之を治することを得べし而して分娩後に至り小供の乳を呑む時の刺戟に堪へざることなからしむるを要す又乳首の陷沒する者は之をひねりて伸すべし但しよく注意を以て行ふべし時には之れがため收縮を起し稀れに墮胎を誘發するの恐れあればなり

出産の時の豫定法

此法は嘗て本法に記したることありしが此頃御腹の大きい方出産せる方多き折柄なれば左に出産時日の豫定法を記さん此法によれば大概は豫定することを得べし

先づ月經の最終に止みし日より算へ之より三ヶ月前に溯るか或は九ヶ月後に計へて之に七日を加ふべし例之へば最終の月經を三月十日に止みしとすれば三月十日より三ヶ月前に溯り算する時は十二月十

日となり之に七日を加ふれば十二月十七日となる是れ即ち出產の當日なりとす譬へ此日は眞の出產日に當らずと云へども其前後三四日の內には必らず出產あるべし月經最終の日を精密に算すればよく當るものにて既に實驗せる人よりも豫測し得たりとの報に接せり

あれ性の人に告ぐ

身分の貴賤を問はず職業の善惡に拘はらずあれ性の人あり斯の如き人は秋の季即ちコレより手足或は顏面に脂の分泌を減じ其局部少しく乾きて硬くなり表皮に小裂を生じ其面はザラ〳〵して偶ま綿の如きものにサワれば綿は手指に纒ひて誠にウルサキものなり世間いろ〳〵の賣藥ありと云へども大概同じものにて又用ゆべきものなし殊に婦人は手仕事の多きものなればアレる場合は男子よりも多しとす醫科大學の教授ドクトルベルツ氏の處法は此あれ性の人に用ゐて效能著るしきが故に未だ之を知らざる人の爲めに其處方を左に記載すべければ之を寫して藥舗に求められよ大學にては之をベルツ水と名付く

處方

一苛性加里	〇、五
一グリセリン	五、〇
一アルコール	五、〇
一香水	五、〇
一蒸溜水	八五、〇

右外用

此藥は固より飲用すべからず又多量を顏面等に塗るべからず唯一滴位ひを手の掌に滴らし之れをよく塗るべし殊に夜間入浴の後使用して寢に就けば明朝其效を見るべし

又あれ性の人には硬水即ち井の水の如きはよろしからず軟水即ち雨水蒸溜水の如きはあれ性の人には甚

よろし故に毎朝顔を洗ふにも直ちに井の水にて洗ふは宜しからざれば其水若くは温湯に糠の汁を入れて洗ふをよしとす然るときはあれ性の人のみならず何れも皮膚を美麗ならしむるの効あり顔を洗ふには最初ぬるま湯にて洗ひ次にだん〳〵と冷たき水にて洗ふをよろしとす石鹸の撰定も又緊心なり香イが幾くらヨクても價はイクラ高くても夫れは餘り効能なし先づ加里製石鹸を尤も適當なりとす

肝油のすゝめ

身体の虚弱なるもの肺病者は勿論腺病質ノドにぐり〳〵あるものなどは冬季肝油を賞用すべし肝油は一概に肺病者の呑むものとして嫌ふは間違へるなり西洋の人は常に脂肪質に富める肉類を多く食すれども日本人の欠點とするところは日常の食菜に脂肪の餘り少なすぎることとなりされば健康の人と雖も之を用ゆるは大に効験ありと知るべし但し夏は胃を害する恐れあれば冬の間に多く之を用ゆべし肝油は隨分香ひの宜しからぬものなれども慣るゝに從ひ左程にもあらず初めは分量を少くし追々に其量を増す樣にせざれば爲めに胃を害し下痢を來すことあり先づ一回大匙に一杯内外毎朝又は毎日三回用ゐるを良しとす若し呑み悪きときは珈琲、牛乳、麥酒等に入れて服用するも妨げなし若し肝油を用ひて下痢することあれば其分量を減ずべし

肝油は其色褐色なるを宜しとす高橋博士の説によれば日本藥局方の肝油は効能薄くして博士の改良に係るものの優れりと東京醫學雑誌に見ゆ

一スコット乳菓は肝油を飲み易く製したるものにて極めて宜し米國ニユーヨーク市スコット及バウ子商會の製品を上等とす之れは小兒などには極めて適當なりヨワサウな人及小供には此冬季飲用せらるゝ樣御すゝめ申すなり

用法大人は茶匙一杯(四グラム)よりはじめ食匙一杯(一五グラム)迄小兒は茶匙の半量より初め一杯迄食後日に三回宛用ゆ之を飲む前にはよく瓶を搖るを要す茲に一の注意は肝油を飲用せば成るべく沐浴を多くすべし然らされば脂の分泌して夏などは臭きに至るべし尙其他詳細なることは嘗て本誌に掲げたる竹中醫學士の寄書中に詳なりとす

食物消化を助くるもの

食物消化の助けをするものはいくらもありますが皆樣も御承知の通り香の物、生薑、肉桂、山椒等の如きものを食物に副へて食べるのは習慣となッて居る。ケ樣の物は、別に身體を養う作用は持つて居らない、唯消化器の神經を興奮させて消化液を餘計に分泌させる爲めに、生薑或は唐辛子、山椒のやうなものを食べ、或は香の物を食べるのである。如何なる御馳走があつても、如何なる滋養物でも、必ず消化液の分泌を促がす物が無ければならない。總て食物の美味と云ふものは右等のものが有ると無いとに由つて違ふのである、肉などには初めより此ものを含んで居るから美味なのである。又野菜類は、素は左程に味の好いものではないが、砂糖、醬油等を以て味を附けると大へんにおいしくなり消化を助けるのでありますから是等の藥味は常に用ゐられたきものなり

器物を洗ひ清むる注意

器物を洗ひ清むることはよく注意せざるべからずドウも時によると淸潔法か屆かないやうに思ふソレは臺所で僅々一度位ひ已に使用した皿小鉢等を水で洗ッて汚ない布片で拭くだけでは洗ッても洗はないでも殆んど同じことである一遍水で洗ッたる後亦更に紙か何にかの中に入れて淸水を灑いで成るべく布片などで拭かないで自然に乾かすやうにしたら宜しか

らうと思ひます其外些細の事の注意は一々枚擧することも出來ませんが畢竟清潔と云ふ事が肝要ゆへソいには成るたけ注意ありたきものなり

食物調理法

凡そ食物の撰擇調理の良否は衛生上至大の關係を有するは勿論又一家の平和にも關する最も大切なることなれば婦人の常に研究すべき一大要務と云ふべきものなり

今や料理法は區々に分れ日本支那西洋等其種類多しと云へども要するに衛生上尤も急務とする處は洋の東西に論なく如何なる料理法にても其善きは取り悪しきは捨て滋養に富み經濟に利ありて日本家庭に尤も適當なる所謂折衷料理こそ尤も必要なり本會常に此感あり時々其心して掲載せしが其後適當なる講師なきに苦み暫時掲載を見合せたり然るに目下女子學院講師なる横井氏には豫て和洋料理法に精通せらるゝを聞き同氏に本會の素志を通じ直に贊成を得て本號以後氏の實驗せられたる其有益なる料理法は續出せらるゝことゝなりぬ會員諸姉よ須らく本誌によりて實驗せられんことを望む

内外實用料理（第一）

横井たま子

妾は久しく内外都鄙の料理にこゝろを寄せ古きを温ねては新敷に替へ洋風を採りては之を國風に徴し内外折衷料理を試みけること茲に歳あり

凡そ上等の料理に餘りに手數かゝり常の用に便ならざるのみならず、魚、肉、野菜等の滋養を失なふの嫌ひなきにしもあらず、且は此道にうとき世間の女

性達にして事繁き家事の片手間に家族のものをして滿足せしむべきやう三度の食事に滋養と味ひと經濟とを兼たるものを調理せんは容易のことにあらざるなり依りてそが助けにもなりぬべきとて出來得るかぎり滋養を失なはず手數を省き、又「アルコール」の害をも避け得べきやう此にこの實用料理といふをものしぬ固より足らはぬ姿か拙き工夫に出てたるもの多ければ大方の君達に感賞を受くべき筈はなけれど聊かなから庖厨に於る手蔓ともなりたらんには妾か喜ひ此上もなきことにこそ

清汁

清汁は精進料理には椎茸又は昆布だしを用うそのだし汁にあく脱鹽と淡く醬油を加ふるのみその煮汁の仕方は椎茸のだしは椎茸を浸し置きたる水を沸へ立てるのみ昆布だしは菓子昆布を水に浸し置きその水を沸へ立つれは泡多く浮くその泡を掬ひ去りて用う若し昆布を水に浸さずして直に沸え湯に入れて煎じるときはその汁滑りて宜しからず水に浸して沸え立つれはその滑り無し、通常の料理の清汁は鰹だしを用う、又鰹だしと昆布だしと半割にするもよし鰹だしの製法は清水を沸え立ゝせ其中へけづりたる鰹ぶしを入又沸え立つ時上に浮びたる泡を掬ひとり直に鍋を下し鰹ぶしの鍋底にしづみたる時絹篩にて漉して用う

但し鰹ぶしを多く入るれは味よし又二番汁を取るも可なり此煮汁を器具に入れ置何品を煮る時にも之にて下煮をすれは其味最上なり

茶碗蒸し

茶碗蒸の仕方は先づ鰹のだしを拵へその沸立ちたる中へあく脱鹽と淡く醬油を加へ之を冷し、而して後生鶏卵を能く搔廻しその汁に交せ、又よく搔廻して之を種物の上より懸けて茶碗の八分目迄注ぎ込み、

茶碗には蓋をせず蒸すなり、但しその蒸し道具は茶碗蒸の數少なければ釜の中にざるを敷きその上に茶碗を載せて蒸す、若し數多き時は蒸籠を用う、又その鷄卵は茶碗三ッに鷄卵二ッの割合にてよし、したぢは茶碗の數に相應するだけにしてその中へ鷄卵の入るべきことを見込むべし、又そのしたぢは空茶碗の割合にて量れは種ものも入るだけは必す餘ることを見込まざるべからす、若し其鷄卵は茶碗の數に應じて破るといへども、したぢの多き中へ交ぜてその汁の餘るときは餘るだけ鷄卵は淡くなりて所謂茶碗三ッに玉子二ッの割合にはならざる也、故に玉子を交ぜざる前に先づ能くそのしたぢの多少を量るべし、又其種ものは生にてよき物は生のまゝにて味附けるべき物は味をつけ湯でるべき物、湯がくべきもの浸すべき物、燒くべきものは皆その下拵へをして、而して後ち茶碗の中へ入るべきなり、

第一例　鰻の蒲燒、松茸、燒栗、三ッ葉

第二例　鷄のたゝき、めじろ、蘿菌、茗荷

第三例　伊勢鰕、平鰹、松茸、栗、つまみ菜

右松茸、蘿菌類は煮汁に鹽を淡く加へてざつと煮る也鷄はたゝきにして錢の形ほどに丸め之を一碗に三ッ粒づゝ入る、めじろは照燒にして入るなり、その他の魚は鹽燒素燒にてよろし、其鷄を用ゐる處は鷄の切身、又は鷄切身にてもよし香料は柚子を用うべし

多人數惣菜の玉子蒸し

煮汁と玉子の分量は右正式と同じ、

人數にしたがひ壹碗づゝ蒸す時は中／＼手數なれば之を略し十人より百人二三百人前でも器具さへ大なれは二三度に手輕に蒸せるものなり先づ十人前なれば十人分を入るだけの丼又はブリッキ製の金だらゐにしとしき者に兩かわに引上る辨理のためカンを

附けて置けば尚よし、右の器具へ人數前の種物をならべ置きその上に玉子と煮汁を交ぜ合せたる汁を上より注ぎ込み釜或は大鍋に水少し入其中にブリッキ鍋を置くための臺として丼か篩にても釜の中へすえ置その上に玉子蒸しの丼、又はブリッキ製の器具を載き釜の蓋をして前の仕方の如く蒸すなり之も湯の入らぬやう注意すべし一家族なれは丼の儘膳に出し中皿に盛りて食すべし之は學校の塾舍賄處にて度々實驗したるものにて至て手輕るに出來るなり、種物は惣菜故、鷄肉、牛肉、貝類、魚類、野菜、乾物類、四季通常の物何品にても數々入たるは玉子斗り煮たるよりも經濟にもなり又老人も青年も悅ぶものなり

折衷支那料理

何魚にても薄くさしみの如く切身にし葛を厚紙に包み連木にてたゝき細かになしたる葛粉を俎の上にひぎ其上に切身を載せ粉をつけては連木にてたゝきのばせば煎べいの如くなる、之を豚の油か牛の油にてあげる也（本來は豚の肉を用ゐるなり）右あしらへには、つと豆腐、又は、燒豆腐、相良麩、椎茸、銀杏、胡蘿蔔、芹、又は、三ツ葉、糸蒟蒻等初めに水にて柔らかになるまで煮て後砂糖、醬油を加へ前のあげ魚を一處に入れ少し汁あるやうにかるく煮れば丁度豚の肉もどきとなるなり之を碗に少し汁ある樣に盛りて客に出すべし

蓮の玉子燒

鷄卵十個に、蓮大なれば一ト節、小は二タふし位卸して鷄卵と能く交ぜ合せ鹽と砂糖にて味つけ燒鍋に油をひき燒けたる時玉子を流し込金蓋をなし其上にも火を載せ上下より燒べし、之は新製法にて色は少し鼠いろにて見へよろしからねど味もよく又中々に滋養あり

折衷林檎の砂糖煮

餘り能く熟くさゞるりんごの皮をむき四ッ切りにして之と同量の水にて凡そ十分間斗り煮たる頃林檎五ッに白砂糖五十目を入れて尚徐かに煮込みりんごの溶けぬ中に火より下しその温氣のある中ビン詰になすべし

但し一周間前後なれは目張りせずとも之を貯へ置くことを得べし

中外彙報

酒嫌ひになる血清療法の話

府下の某藥舗が酒不可飲なる藥を製して盛んに新聞紙等に廣告せしは兩三年前の事と覺えしが、耽酒家は西洋にても誠に社會の持餘し者なりと見え、酒を嫌はしむる工夫を案出するもの頗る多き中に、近き頃巴里にては酒嫌ひになる血清療法を發明せし人あり、勿論此事は過日の某新聞にも一寸掲載しありしが、近着獨乙醫事雜誌に此血清に就きて批評しありたれば、今其大要を茲に轉載する事となしぬ、」

此血清療法はフローカー、ザベリエー、テボー等の學士が研究せし所にして、馬にアルコールを與へて後其血液を取り是より血清を送り、此をアルコールを好む動物に注射する時は、全く酒嫌ひとなり、啻に酒を嫌ふのみならず、酒精分を含める食物は如何なる物なりとも決して之を口にせずと、氏等の説にては此血清の斯の如き功力を有するは、一種の成分を含めるが爲なりとし、之を「アンチエチリン」と命じぬ、氏等は上述の如き成蹟を人類に就ても亦擧げんと欲して、之を多數の耽酒家に注射せしに五十七人の内廿二人は全く酒嫌ひとなり八人は少しく其功を奏し殘り十七人は全く無功なりしと、

獨乙雜誌の評に由れば、此療法にして若し果して功を奏するものとせば恐くは慰愉的の功力を有するものにして、決して「アンチエチリン」の功にはあらざる可しと、兎に角斯る新療法は未だ輕々しく之を用ゐざる方可ならんとの事なり

●皇后陛下よりの恩賜

北清事變に關しては既に　天皇陛下より渡邊侍從武官を　皇后陛下より山川權掌侍を遣はされ內外傷病將士に對し最と優渥なる
聖旨を傳へさせられ且つ當時內外傷病者に御下賜品等もありしことなるが兩御慰問使奏上の結果更に
皇后陛下より內外負傷者に向つて義眼、義手、義足の、御下賜あり陸海軍大臣は御趣意を承りて夫々部下に通達する所ありしといふイツもながら御仁慈の厚き感激の至に堪へざるなり

●蜻蛉保護法

蚊に惡疫を傳播するの害あり現に先頃も黑死病の蔓延に對し其筋にても之か驅除を謀りたる次第なるか米國にては疾くより此害蟲を驅除するに苦心する所あり蜻蛉は無害にして最も嗜て蚊を食すれは此蟲を利用して蚊を驅除すること然るへけれとて曾て二匹の蜻蛉を捕へ之を籠に投して試驗したるに六時三十分間にして能く八百匹の蚊を喰ひ盡したりといふ此蟲は翅甚た强くして且つ食慾大なれは此蟲に保護を加へ成るべく其繁殖を助くれは蚊を驅除するの功を收むること殆んと疑ふあるへからす今は米國政府其保護法につき專ら調査中なり我國にても小兒の蜻蛉を苦しむるなとは大に制すること肝要なるべしとのことなり

●齒の清淨法

本年夏伯林市に開かれたる第三十九中央齒科大會に於けるライプチヒ大學講師リヨーゼ氏の演說は從來

屢々專門家及世の疑題たりし齒の清淨法は何を以て最も適當となすか。問ひに答へて氏が多年の間檢査せし成績を公にし且齒の清潔法はツマリ器機的齒磨法に優れるものなきことを明言せりといふ氏は現今世に行はるゝ洗口劑、齒磨水、齒牙チンキ、齒磨粉等の法劑を一々標本に就て檢査し殊に其效力を試檢したるに何れの製劑に論なく其作用時間の短きが爲め充分に防腐殺菌の力を逞うして食物の殘余等より來る齒牙の侵害を防ぐに足らず遂に善良なる楊枝を以て齒牙自體、齒の空間及咀嚼面等の清潔法は蟲齒の豫防に對する最良方法たることを認定せりと但し適當の洗口液即ち化學的に齒牙及口腔粘膜を侵さざる者は之を器機的清淨法と合せ用ゆるも不可ならすと云へども現在の製品にして充分此目的に適するものあるを見ざりきといふ又楊枝は常に無害の消毒性なる液中に貯へ其制毛の柔らかにして甚だしく密植せざる者を佳とし且其齒刷は長きに過ぎざる樣注意すべしと論せりといふ其說たる珍らしからざるが如しと云へども食物の殘滓を除去するは齒牙酸敗の害を除くがためには最も有效なる良法なるべし

◉癩病の治療法

萬朝報外國新聞譯載の記事に曰く英國の醫學者ハッチンリン氏は今より二十年前に魚食を絕ちて全治したる癩病患者あることを發見したるが爾來幾多の實驗を經て頃日に至り此方法は如何なる癩病者に施しても有效なることを確めたりといふ但し其快復期は頗る徐々にして全く其病根を絕つには至らざるも手足の斑點の如きは漸次除去せられて殆んど無病の人の如くなり尙又魚食を絕つと共に暴食せざることに注意し且つ極めて少量の砒素（毒物）を服用するを可とすといふ其當否は固より知るを得されども暫く記して他日の參考に資す

◉新救急回生法

近頃ラボールド法として傳へらるゝ新救急回生法は頗る簡單にして溺死者などを救ふに最も有効なり即ち其法は絶息者を仰向に臥さしめ頭部を低くし頸部の衣を緩め顎を開き小刀の柄又はステッキなどを以て奥歯に楔をかひ指端にハンカチーフを纏ひて咽頭の粘液を拭ひ去り然る後拇指と食指にハンカチーフを一重ばかり纏ひ舌を滑らさゝる用意を爲し成るべく深く舌を攫みて一分間十五度の割合にて強く舌を引き伸ばし引き伸すと同時に又之を緩め戻す是は舌の尖のみならず舌全體に動くやう勉めざる可らず舌の二三度引き伸ばされたるとき左の食指を以て常に嘔氣を促す時の如く徐に之を咽喉部に差し入るれば一層其運動を容易ならしむべし舌の此運動は三十分も續くべく縱し一時間經ちて其効なかりしとて未だ斷念すべきにあらず一時間以上にして呼吸吹き返したるもの往々にしてあり若し他に人手あらば一人を絶息者の頭の方、一人を足の方に置き胸部と胃部へ兩方より壓し掛かり普通の人造呼吸法を行はしむべし但し舌を引き伸ばしたる時を以て一とし緩め戻したる時を二とし此二の時に胸部、胃部に乘り掛り一の時に突然其壓迫を緩めしめ互ひに其節度を合はすべし是は皆人の平日に心得置くべき事なりと

（時事新報）

◉看護婦試驗と除外例

東京府に於ける看護婦取締規則は愈々去る十月一日より實施せられたるが同規則に依れば看護婦たるものは一定の試驗に合格したるものにあらざれば免許狀を附與せられざる規定なるも該規則實施前に於て二ヶ年間病院其他に於て看護の業に從事したるとの醫師の證明あるものは試驗を要せず東京府に於て看護婦免狀を下附すべき筈なるを以て先頃より同府

廳に向て願書を差出すもの多し然れども區長の奥印なきもの履歴證明書なきもの又學校免狀は寫と共に本書を持參せざるべからざるに之を携帶せざるもの等ありて無難に受理するもの少しといふ

◉看護婦と出願者　府下十五區八郡に於ける看護婦營業者は目下千八百四名にて其の中無試驗免狀下附を出願したるもの二百四十名なりしが獨立營業滿二箇年に達せざるものもあれば實際免狀の下附を得る者は大抵半數位ならんといふ

◉産婆試驗　東京府産婆開業試驗は去十日より市會議事堂に於て筆記試驗執行中にて受驗者は五十餘名なり右筆記試驗終了の上は成績を調査し合格者に就ては更に來る廿三四日頃より實地試驗をおこなふ由なり

●廢業娼妓の引受　東京婦人矯風會にては廢娼會に交渉して廢業娼妓を引受る事を議決しかねて準備し置ける慈愛舘を以て之に充て其維持の爲めには演説會を開きて有志の寄附を募り引受けたる娼妓は看護婦となし或は有志家に托して下婢となすの方法を執るべしといふ

◉ペストと氣候の關係　ペスト病は元來赤痢腸窒扶斯虎列剌等の傳染病とは其病質を異にし一種の藪澤病にして從來の經驗に徵するに酷暑大寒の際には其流行甚しからず却て該季に際する時は病毒伏在地と雖も暫時撲滅せるが如き狀況を呈し春秋二季の如き好時候に際せば再發し益々該病毒を社會に流かす事常なるが故今回再發せる大阪市に於けるペスト流行地に對し大英斷を以て該病流行地及該附近の民家取拂をなさず現在の儘の豫防消毒法位にては大阪全市をして再びペスト流行地と爲すに至らんかときにわらんと某衛生局員は心痛語られたり

◉肺病取締法案　近年肺病の傳播甚しく爲に人命

を損すると夥きも未之が取締法あらざるが若之を放任せば將來何程の傳播を見んも知るべからざるに依り其筋にては獨逸其他に行はるゝ取締法を參酌して嚴密なる取締法を設けんとて目下專ら取調中の由

◉赤痢病猖獗の傾向　衛生局の調査に據れば全國各府縣下に於ける本年初發以來去十日迄に於ける赤痢患者の概數は三萬二千五百四十人內死亡六千七百二人にして昨年の當時に比し殆ど三分の一强にして著しき慘狀は呈せざるも本月に入りて以來各府縣共益々續發の傾向を來たし即ち去る一日より十日迄に同患者四千七百五十五人內死亡千百七人の多きに達せりと云ふ

◉芝區の腸窒扶斯　芝區愛宕下町舊仙臺屋敷は二丁四方內に人家五百三十戶を有する場所なるが去月十日頃より系統不明なる腸窒扶斯患者を出し爾來續々發生傳染して去る一日迄の累計患者二十一人內死亡五人に達し尙ほ益々蔓延の傾向を有するを以て直ちにして該廓內に嚴重なる淸潔法を施行し尙ほ急に新水道共用栓四個を急に取附け舊水道の使用を禁することゝ爲したり

◉傳染病救濟金庫　內務省衛生局員の發起にて標題の如きものを創立し爾後募集したる義捐金三千餘圓に達し一昨年來ペストに罹りて其職に殉したる故檢疫官馬場碩一、醫師山中篤衛、同若林啓の三氏へ各三百圓宛を贈り殘金二千百圓は其儘大日本私立衛生會へ移し同所に於て爾後益々其目的を達する計畫なりと云ふ

◉東京市の秋季種痘　東京市は例年の如く冬期天然痘流行期に先ち各區役所に命じ種痘を勸誘せしめ尙ほ貧困者には强制種痘を施行するに決し既に京橋麴町兩區は去十日より實行せしが其他の各區も施種人員調査の了るに從ひ種痘を開始する筈なり

◉昨今の傳染病　目下駒込避病院に入院中の傳染病者は窒扶斯七十五人赤痢六十三人實扶的利亞五人計百四十三人なりと

◉信州に於ける人類學講習會

信濃松本及豊科村に於て開きたる人類學夏期講習會には理學博士坪井正五郎氏出張せられしが聽講者は二百二十九人にて内婦人は二三十名ありしと同博士は又同地の女子部同窓會、松本婦人慈愛會、裁縫科同窓會等に於て諸人種の遊技、アイヌ救育、諸人種の衣服等に就きて演説せられ又南安曇郡豊科村にて催されたる同講習にも臨まれ人類學的考古學を講述されしとのことなるが其際にも又多數婦人の聽講者ありて婦人の學に志すものは割合に多しといふ

正誤　本誌第百三十號四十五頁に外國婦人と日本婦人と題して記載せし事實は誤謬多しとのことなれば茲に全部削除のことゝ御承知た乞ふ

又前號二十二頁表皮膚眞皮膚は何れも膚の一字を除く事　二十三頁脂腺物は脂様物同眼瞼縁等こそは等にゝ存すれども　二十四頁アルカソーはアルカリー　二十五頁効藥は齊藥二十頁此國は此圖の誤り等多く誤植あり願くは恕せられよ



大日本婦人衛生會記事

十月例會

本會の集會は炎暑中會規により暫らく休會せしが秋冷を覺ゆるの好期節となりたるを以て本月六日第一土曜　午后一時より神田御茶の水橋外女子高等師範學校内に於て本會の例會を開きたり當日　總裁殿下にも御臨場の御豫定なりしが俄かに御差支の趣仰せ出されたり

會場は高嶺校長の注意により同校の大廣間を貸與せられたり定時に至り醫學博士中濱東一郎君の講演は始まれり續いで醫學博士土肥慶藏君の皮膚病談あり貴重なる摸型繪圖等に就きて詳述せられ四時頃に至り散會せしが當日は鍋島侯爵夫人を初め子爵夫人田中須磨子子爵夫人松井正子濱尾副會長幹事穗積歌子高木かち子松平芳子三浦教子及緒方岡田丹波中濱芳子等（イロハ順）來會せられ師範學校生徒の多數は又會員と相連りて傍聽せしかば頗る盛會なりき鳩山夫人は忌服中の故を以て出會せられざりき餘白乏しきがため只其梗概を記すのみ

山形支會例會

同支會は本月七日第一日曜日高等女學校に例會を開き關會長にも出席せられ來會者五十餘名高橋貞次郎君には乳齒時の衛養　齲齒の注意遠山矢十郎君には運動の必要北島醫學士は水の話に就き何れも懇切に講話せられ午后四時散會せられたりといふ

●會員種類變更

左の諸氏は本會の爲め左の如く會員の種類を變更せられたり

終身會員	替特別會員	三浦敎子
特別會員	替通常會員	濱欽子
特別會員	替通常會員	木場こゆり子
特別會員	替通常會員	三井曉子
特別會員	替通常會員	今村家壽子
特別會員	替通常會員	伊東千せ子
特別會員	替通常會員	岡山とし子
特別會員	替通常會員	國井よしを子

●本會入會者

（山形支會）

○事務所中込

●本郷區駒込追分町五十四番地　特別會員　森喜い子

●府下南多摩郡八王子本町一丁目八番地廣瀨方　通常會員　柏原萩子

●麻布區新網町二丁目五十一番地　通常會員　川地遊龜子

●本郷湯島天神町一丁目廿四番地　通常會員　高橋森子
●迩江岡小笠郡掛川町報德社第三館内　通常會員　駒塚元子
●廣島市大手町五丁目四田病院内　通常會員　林久滿子

○明治病院門非わい子紹介
●淺草區旅籠町二丁目十一番地　通常會員　有山ふさ子
●明治病院内　通常會員　和田ゆき子

○牛込增田せい子紹介
●本所區外手町八十番地ノ二　通常會員　須崎とき子

○甲府武田清四郎君紹介
●甲府市紅梅町五十六番地　通常會員　進藤つる子
●甲府市新青沼町四十七番地　通常會員　小田切浦の子
●山梨縣西山梨郡相川村七十二　通常會員　深澤まつよ子

○山梨縣深澤清賢君紹介
●山梨縣中巨摩郡三町村六十四番戶齋々醫院　特別會員　中村きん子
●甲府市相生町四十四番地乙黑須壽堂醫院　通常會員　乙黑武子

○甲府武藤秀直君紹介
●山梨縣病院内日本赤十字社看護婦養成所　通常會員　吉田松代子
●仝所　通常會員　稻村みつ子
●仝所　通常會員　河野久和榮子
●仝所　通常會員　小尾あさ子

○筑前松田末子紹介
●高知縣土佐郡江ノ口大川筋七十四番地　通常會員　中村てる子

○女學會中桐理事紹介
●小石川區指ヶ谷町七番地　通常會員　原靜子

○千葉てる子紹介
●廣島市鐵砲町山縣金次郎方　通常會員　五十嵐きく井子
●仝所　通常會員　伊藤れん子

○牛込和田愛子紹介
●神田區駿河臺西紅梅町十二番地　通常會員　山岸とし子

○大學森もと子紹介
●第一醫院　通常會員　宮川うら子

○日本橋區林つる子紹介
●牛込區新小川町二丁目十一番地　通常會員　長岡あい子

○日本橋區宮田けい子紹介
●麴町區一番町三十九番地　通常會員　福島多喜子

○大坂贊成員安東忠次郎君紹介
●大坂市北區曾根崎上二丁目七百廿三番屋敷　通常會員　池田ゑい子
●大坂市東區大川町五十三番屋敷　通常會員　竹中貝子
●大坂市東區今橋二丁目廿五番屋敷　通常會員　安東新子
●岡山縣英田郡倉敷町二百四十三番地　通常會員　竹内かん子
●富山縣高岡市鴨島町三十九番屋敷　通常會員　渡邊ゑつ子

●熊本市河原町二十五番屋敷　通常會員　橋本たく子

山形支會

○支會幹事川上きん子紹介

●山形市桧物町　特別會員　北島もと子

○仝幹事國井よしを子紹介

●山形市旅籠町五九四　通常會員　奥山なか子

◎臺灣松住氏通信

○臺灣鈴木きん子紹介

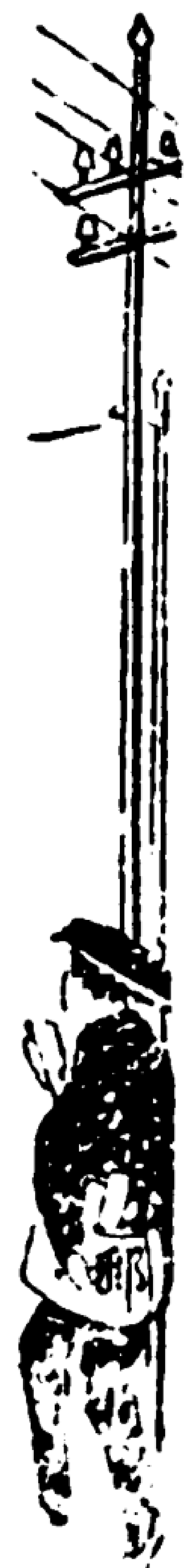
●臺灣臺北東門街土地調査局官舍にノ五　通常會員　熊城照枝子

●仝所官舍はの一號　通常會員　四倉ゆう子

○臺灣佐藤喜枝子紹介

●臺灣臺北東門街乙第二號五室　通常會員　平田まさ子

轉居



會員諸氏御轉居の際は必らず乍御手數本務所宛御一報相願候

●本所區石原町九十二番地へ　宇數かつ子

●山梨縣西山梨郡里桓村長光寺横町駐在所へ　西村とし子

●新潟市醫學町通一番地六十三番地へ　三村久子

●牛込區矢來町三番地西殿四十一號へ　北代竹子

●岡山市野田屋町二百二十三番邸へ　山川春二君

●麻布區我善坊六番地へ　吉野仲子

●淺草區橋場町十二番地内藤別莊内へ　古川節子

●廣島市鐵砲町山縣金次郎方へ　千葉てる子

●横須賀中里七十番地へ　清水富喜子

●本郷區千駄木町二百二番地へ　中村改　中島武子

●本郷區駒込千駄木町三十八番地　三浦守治君

●牛込區南町十番地へ　小篠もと子

●麻布區富士見町二十三番地へ　尾關つる子

●牛込區大久保余丁町三十五番地へ　澁田見まき子

●牛込區藥王寺前町七十四番地儀假方へ　北川さわ子

●四谷區仲町三丁目十五番地へ　奥宮かす子

●麹町區三番町三十二番地　榊實子

●京橋區銀座三丁目十九番地へ　植木ゆき子

●京都市上京區小川通下立賣下ル八幡町曾谷泰一郎方へ　尾崎さい子

●岡山縣赤磐郡布都美村大字石上七十一番次一番印へ　長光喜世子

●深川區常盤町一丁目十番地へ　中濱千代子

●仙臺市東三番町四十番地へ　三島好子

弔詞

本會通常會員田原しげ子、（長野）山形支會佐藤なみよ子、大學第一醫院柵部きよ子の三姉は今回死亡せられたるを聞き本會は謹みて哀悼の意を表す

大日本婦人衛生會廣告

會計幹事移轉

本會々計主任幹事高木かう子には今回左の處へ移轉相成候間爲替振込は小爲替を以て左記へ御送付相成度候也

麴町區内幸町一丁目三番地

爲替振込芝之櫻田支局

十一月例會

本會十一月例會は同月十日第二土曜日午後一時より開會の事に相定め候會場講師等は追而御通知に可及候へども右時日のみ豫告致置候也

三十三年十月

私立大日本婦人衛生會

廣島醫學圖書館 設立ノ趣意

輓近我邦諸般ノ學術開ケ文物ノ美古來其比ヲ見ス就中醫學ハ夙ニ長足ノ進歩ヲナシ今ヤ殆ト窮極スル所ヲ知ラス其日新ノ學理ニ則トリ益々其秘縕ヲ究メント欲スルモ斯學ノ淵源廣大深遠ニシテ頗ル容易ノ業ニアラス假令志アル者ト雖モ限リアルノ財ヲ以テ限リナキノ圖書ヲ購讀スルコト蓋シ難矣況ンヤ資力ニ乏シキ醫藥學生ニ於テオヤ茲ニ同志ノ士相謀リ廣島醫學圖書館ヲ設置シ古今内外ノ醫學藥學衛生學等ニ關スル圖書ヲ蒐集シ汎ク志學者ノ閲覽ニ供セント欲ス大方ノ諸氏希クハ御贊成アランコトヲ

廣島市猫屋町百〇七番邸

廣島醫學圖書館

私立大日本衞生會

◎新潟支會規則

第一條　本會は大日本婦人衞生會に屬し婦人衞生の研究を目的とし兼て一般慈善事業を爲すにあり

第二條　當支會の會員は左の六種とす

終身會員　一時限り出金貳拾圓

特別會員　毎月　金參拾錢

通常會員　仝　金貳拾錢

支會員　甲毎月　金拾錢

　　　　乙仝　金五錢

第三條　入會せんとするものは役員に申出て其承認を得べし

第四條　會費毎月拾五錢以上を納むるものには本會衞生雜誌を配布す

第五條　會費は雜誌料として一部を本會へ納め殘金は銀行へ貯蓄して衞生慈善資金とす

第六條　支會には會長一名副會長一名評議員十五名幹事五名理事一名を置く

會長副會長は總會に於て公撰し評議員幹事は會長之を撰任す各役員の任期は一ヶ年とし再撰するを得役員は總て無給とす

第七條　支會は毎月六日通常會を開き衞生及び慈善に關する演説をなすべし

第八條　毎年一月總會を開き支會の要務を舉行す

第九條　本會は毎年春期懇親會を催し時宜によりては慈善販賣店慈善演藝會等を開くことあるべし

第十條　天災事變に際し慈善救濟を要する場合に於ては特に會員中の有志者より物品の寄附を募ることあるべし

會員外の篤志者より臨時金品の寄附あるときは役員の協議を以て特待員又は賛成員となすべし

第十一條　一般慈善事業の賛助天災事變の救濟の事務は役員會の決議により實施するものとす

第十二條　支會々員は服裝其他を質素にし集會の際は成可く綿服を着用すべし

第十三條　特に本規則に掲げざるものは私立大日本婦人衞生會の規則を準用す

私立大日本婦人衞生會

◎山形支會規則

第一條　本支會は私立大日本婦人衞生會々員山形市在住者を以て組織す

第二條　本支會に會長副會長の外幹事四名商議員若干名を置く

會長副會長は公撰し幹事商議員は會長之を撰任す

役員の任期は一ヶ年とす

第三條　本支會は毎月一回(第一日曜日)講話會を開き毎年一回(五月)總會を開き講話の外役員の撰舉庶務會計の報告をなす

第四條　入會せんと欲するものは宿所姓名並に第五條の通り會費を添へ會員に紹介を依賴すべし

本支會を退會せんとする時は其旨幹事に申出づべし

第五條　本會々費は會計幹事に納むべし

但し六ヶ月　又は一ヶ年分

新に入會のものは其月より六月又は十二月迄の分を一時に納むべし

第六條　服裝は精誠質素なるを要す

上着及羽織は絹布を用ゐるを禁ず

明治三十三年二月四日創立

私立大日本婦人衞生會

山形支會

事務所山形市檜物町川上方

●大日本婦人衛生會規則摘要

一本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究せしめ衛生上の智識を開發せしめ随て社會全般の幸福を增進するにあり
一會員たらさ欲する婦人は何人にても入會することを得
一入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込むへし入會者には會員證を交付す
一會員を分ちて終身特別及通常の三種とす
一終身會員は一時に金拾圓以上●特別會員一ヶ月金貳拾錢以上●通常會員一ヶ月金拾錢を納むるものとす●男子賛成員亦同し
一男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を賛成員とす其會費は本會員に同しさ雖も本會に功勞あるもの又は本會に於て特別賛成員たることを望むたる者は役員協議に依り無會費とすることあるへし
一會員は本會に於て毎月發行する雜誌を無料にて受ることを得
一退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より又通知すへし但既納の會費は返戻せず
一集會は例會總會及評議會員とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし通常第一土曜日午後一時より開會するものとす
但毎會學識經驗ある者に衛生上の講義演說談話を囑託し會員をして随意聽講せしむるものとす
一會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を陪聽せしむるを得(勤めて衣服は質素たるへきこと)
一講義演說等は男子の傍聽を禁す但賛成員若くは會員縁故ある男子は此限にあらすさ雖も賛成員の外は本會の都合に由り臨時謝絶することあるへし

●支　會

一地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得
一本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載し申出つへし爾後員數增減あるときは其姓名を支會より本會事務所に報知すへし
一本會々員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす尚詳細は本會事務所へ照會すへし

●注　意

一會費は東京府下に限り毎月會費領收人を差出すへし地方會員入會の際は前金を以て會費三ヶ月分又は六ヶ月一ヶ年分を納付せらるへし
一會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局(東京牛込郵便局)宛振出あるへし又通運便何にても差支なし
一會費金は受領證を交付すへしさ雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に郵券三錢を添へらるへし
但止むを得さる場合には郵券を代用するも妨げなしと云へとも總て一割增さす
一轉居せられたるときは其旨必らず本會事務所宛通知せらるへし
一會員中若し本會の障害となるへき所爲ある者又は屢々會費を督促するも納付せさるものは役員會の決議を經て除名し若くは廣告することあるへし

廣告料	
一行	八錢
一頁	參圓
總て前金	

本誌定價一部二十錢　每月一回發行

東京市牛込區矢來町三番地中丸、四
發行所　私立大日本婦人衛生會
東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行者　田中德三郎
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　戸上義章
東京牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　株式會社秀英舍第一工場

（明治二十六年四月四日第三種郵便物認可）（明治二十一年二月二十八日內務省認可）